新拾遺和歌集 上

特別
へ4
8099
19(1)

[illegible]文庫

へ4
8099
19
(1)

<2001-041>

新拾遺和歌集巻第一

春歌上

立春の心をよみ侍ける　　中納言為藤

ゆふしてもかけてしるしや久方の岩戸の開てはるやこし梅のん
春のたつしるしみせける

法皇御製

天の戸のあくるをまつほとは春の霞とともにたちける

前中納言定家

いつはとも分山の霞きえかけり空におほなひく春はきにけり

宝治二年百首歌めしけるついてに朝鶯

後嵯峨院御製

鶯のさえつるこゑのあさあけの霞にたなひく春のしらせ

亀山院御製

春といへは白雪なからにほひけり霞そめつる峯の雪

藤原基俊

春の日に花とみるまてたなひける霞の中の春の山のは

源俊頼朝臣

山里はつもれる雪もとけなくに霞ふかくも春の色なる

前大納言為氏

若菜つむ野辺の雪まにけさみれは霞にまよふ春の山のは

嘉元二年伏見院三十首歌中に

時しあれは風の霞もたなひきてまたき野山の雪もきえゆく

永福門院

文保三年後宇多院に百首歌たてまつりける時

春風にさそはれ霞の衣野はさむきもとの雪もきえたえにふる

後西園寺入道前太政大臣

亀山殿にて人々花をさくりて千首歌つかうまつりける

山家早春

春はまた初瀬の檜原かすめとも猶雪けなるさゆる山陰（風イ）

前大納言実教

春きても中々に

あしひきの山の霞は浅みとり春とも志らぬ雪のふる里

二品法親王覚助

文保三年百首歌たてまつりける時

みよし野の山も志ら雪ふるさとにかすめる春の吉野川かな

前大納言為定

御裳濯の瀬々の白糸春くれはあをさにとけてゆく水のこゑ

前中納言為相

嘉元内裏に百首歌たてまつりける時

春風にうちとけわたる吉野川瀬々の岩波をとそきこゆる

後照念院関白太政大臣

春風の野沢のかたへきえてゆくたまらぬ水のおとそ聞ゆる

参議雅経

嘉元々年百首歌めされける次に

後宇多院御製

宮この袖かりてみるわたし衣は花よりもなほまさりけり

春の哥とて読る　紀貫之

春きては風吹ことにかたわれは瀧の水よりも花そちりける

暁の嵐に咲花ちれとも鶯なきつる浪の花やあかさん

寛和清涼殿上哥合に

大納言斉信

雪とけて谷の声や山の巣たつ鶯はむへも春をしらん

山家鶯といふ事をよめる

従三位頼政

谷ちかき宿はきのふや鶯の里なれそむるかきねかな

籬にも

大納言師賢

鶯の谷の戸出て鳴けるに山もかすみて春きぬる日は

法性寺入道前関白太政大臣

ときはなる谷の雪も今朝たえて鶯の声のしたにいかにやあるらん

兼曆後番哥合に霞をよめる

権中納言通俊

朝まだき山の霞をみわたせは花をさへこそたちへたてけれ

春哥の中に

藤原隆祐朝臣

あさ日影さし出る空の足引の山のはかすみ春のきにけり

文保三年百首哥たてまつりける時

三条入道前太政大臣

春はなほ志賀の山越かすみても雲まに見ゆる三輪の杉むら

百首哥奉りける時霞

権大納言義詮

萬代の始の春とけふよりや空もかすみのたちそめけん

東三條入道摂政家賀屏風に

大中臣能宣朝臣

霞をもわけて霧とも吉野山河の流は春とたのまん

題しらす

山邊赤人

あつさ弓春になるらし春日山霞ハ今朝そ式部大輔

堀河院御時百首哥奉けける時霞を

大納言師頼

我のみや見ぬ春の霞をはるかにもたゆたふ浦と高山

建久元年内裏十首哥合に野径霞

前中納言定家

春日野のかすみの衣山風にしのふもちすりみたれてそゆく

石清水社哥合に河上霞

皇太后宮大夫俊成女

橋姫の袖のあさ霜なほさえてかすみ吹こす宇治の川風

建保三年名所百首哥奉ける時

正三位知家

玉江やこる河上遠く霞ミし波かともなき夕霧の空

石清水社哥合に

前大納言為家

紀の国や吉野の川のなきさ浪年のみなかみかすミそかはる

嘉元百首歌奉りける時霞

園光院入道前関白太政大臣

みちぬれはさなからしほる春は猶霞にたとるしかまの浦浪

建保名所百首奉りける歌

従二位家隆

志賀の海のしほならぬ浪の上まて霞をわけて浦風そ吹

亀山殿千首歌に霞

前大納言為世

よかやく旅も浦もとりつゝ霞みてはこゝろも春のうら浪

春の歌の中に

後鳥羽院御製

明ぬとて春の舟の浦ゆくも霞のこさにしをれ行浪

五十首歌合に

嘉陽門院越前

春くれはなきさの浪のよるひるも霞の浪のたゝぬ日そなき

建仁元年五十首歌に

後京極摂政前太政大臣

いつくの子日の松のゆきしより松やかすみのまことなるらん

曽祢好忠

山かつの霞にこもる賤かやのしはしたえ行けふりなるらん

百首歌奉りし時

等持院贈左大臣

霞みゆく鶴の舟の浦かせにゆくかた見えぬ春の里人

嘉元百首歌奉りける時霞をよめる

自らの袖も涙もうち霜消てやつるらむ程は春の夜の月
法印定為
春の程は春の外なる白雲は消しとはあかりてやつるに見えし
前大納言経継
久安六年崇徳院に百首奉りける時
大炊御門右大臣 云然
秋ことにあはれはかりの外なしといふさへ淋しかかる荻の焼原
寛治二年堀河院に百首奉りける時沢若菜
山階入道前左大臣
いはゝしのよとむ心足曳の山沢水はなほ浅からぬ
弘安元年亀山院に百首奉りけるとき
前大納言為兼
春しらぬ又二月の雪消ておきまよふ花にとまらむ心の大
文保百首歌よみてたてまつりし時
芳院利花院右大臣
たれか為の梅香なるらむ花の枝にやうに出過る又あかれそ
中納言為藤
梅かおふ袖の香にほふのまに山かけ衣春も色ふかく
根有梅
西行法師
主しらぬ草木の花の色なれは香にのみ梅さくる
文保百首歌たてまつりし時
前大納言為世

きよらにて梅の匂ひをかり衣袖にうつさん人のとかめも
おられにし人の手ふれし梅かえをやとへそ

小弁

浅みとりそて梅かえのたちえをうつすともにほひのかくれなき花

前大納言為世家三首歌よみ侍りしに梅

侍従為親

春風の匂ひにまやたとらん人梅かゝ宿をとふ人もかな

百首歌よみ侍りし時同心を

等持院贈左大臣

こゝろなき袖にさへなを梅かゝのたちそふ春風

入道二品親王性助五十首歌より

後西園寺入道前太政大臣

梅か香は梢の雪の底にほふ匂ひさそひてかすむ春の夜の月

題しらす

伏見院御製

旅人の袖にも梅の匂ひきて春のなかとしのはれぬらん

うき世にはうかれぬ梅の匂ひにそ立とまりつゝ花そかく

紅梅をよませ給ける

花山院御製

香をとめてとふ人もなき紅梅はいろにそいとゝ匂ひける

伊勢の枝の家にむかへは梅の枝もむかしにかはる

紅梅

亭子院御製

梅も香をたのむ心にちらて春たつにゝほはぬ梅そはるかなき

野春雨といふ事を

後久我太政大臣

春雨はふりかくせともあさみとり野へにはしるくもゆる若草

寛治百首哥に春雨

衣笠前内大臣

いつしかと小萩のめもはる雨にぬれてかたよる春雨のころ

文保三年百首哥奉りし時

前大納言俊光

春雨の名残の露も玉ぬきてみたれてもむすふ青柳の糸

柳をよめる

前中納言匡房

浅みとりそめかけたりと青柳のいとより春は風やみたれん

寛治百首哥に行路柳

前大納言基良

うちひさす春さめのそほふる大路にゆきかふ人の青柳乃いと

寛元百首哥奉りし時柳

権中納言公雄

さかのの霞の袖に青柳のいとまそれわか衣なかくし

たかかりし心を

素性法師

池水の浪はひさなからうつる柳のいとそはなれぬよそにみえつつ

伊勢大輔か家哥合に池辺柳といふ事を

よみ侍ける

春風のまゐ池のかかみにけしうかむ青柳のいと

題しらす　　　　　　　　　　柿本人丸

浅みとり野辺の青柳いとくらんいと浅緑吹くる風そありやと

赤人

春霞たなひくかけは夕月夜さらして照らん高砂の山

宝治二年百首哥に　春月　　　　前大納言為家

かすむ夜の月乃桂を木間より光を花とうつろひにけり

春哥とてよめる　　　従二位家隆

天原空ゆく空をなからむ世はかすみてすめる春の夜の月

御製

かすむ夜そ外山の雲は消えなくも山乃端に月をまつらん

海路の哥とてよませ給ける　　法皇御製

春霞の松原の月秋の海路たのむと思ひき林霧君哉

百首哥奉けるに旅を　　関白前左大臣

浦ちかくみえてもはるの海原のきこゆる空やうみの錢みえ

浦帰雁といふ心をよめる　　藤原為道朝臣

海と空白雲のなかに分る為浪にかすみてはかへるかりかね

名所百首哥奉りける時　　　正三位知家

桜はちるらんとおもへは山のはをこえてかせもやまさりけり

花下に　素暹法師

水草の思ひの流のうへてはなちる桜かりの袖かな

後九條前内大臣

山こゆる花の嵐に雨そゝく雲さへかゝる月のかけかな

伏見院御製

我宿はいさなれとこし春の花のなこりもあかぬ桜かな

百首哥たてまつりし時　帰房

前関白左大臣

なかむれは心とまらぬ花もなしさくらのかけの春の夕くれ

嘉元百首哥奉りし時花を

一條内大臣

春かせのかすみに匂ふ山桜花のさかりをまちし心を

花下に次　後照光院前関白左大臣

桜ひとりちるもむかしにかはらねはのこる心の花のかけかな

建仁元年五十首哥に　初春待花

後京極摂政太政大臣

春きてはまつ花さそふ風のことをしまてしとたえぬ山のはの雲

二品法親王守覚家五十首哥に

前中納言定家

桜色の庭の春風あともなしとはゝそをたにゆきとやはみむ

皇太后宮大夫俊成

山桜咲庭るあさし名暮ことにまちこそみけれ春の夜の月

百首哥よミ侍りし時花

右兵衛督為遠

雲とのミ見つゝぞあふぐを山桜いかにかゝみのたちつゝ山らん

五十番哥合に春風

後伏見院御製

明ぬる霞をわけば吹のこる風のさそふ風の花のかをりなり

春哥の中に

土御門院小宰相

雨ひとつ春夜は花に吹あへて嶺の桜をなほ霞風

正治二年後鳥羽院に百首哥奉りける時

前大僧正慈鎮

入あひのをとは霞にうつもれて雲こそ花のかゝれ山

花の哥とて

俊恵法師

さのミやは梢ゆる雲に眺べき人は花をも山桜さくなるらん

院御製

しら飛る雲にまがひし花の色ハ山の大空さらにかすみなりけり

文永二年白河殿にて人々題をさぐりて七百首哥よミ侍りける時山花といふ事を

前大納言為氏

高砂の松のみどりの雲の色に出て花にかさなる山のしら衣

右兵衛督直義よませ侍りし日吉社七首哥の中に

花盛開といふ事を　民部卿為明

をちこちの桜は雲にみえわかれく風のゝ花盛
春に白川

新拾遺和歌集巻第二

春歌下

花歌の中に　光明峯寺入道前摂政左大臣

山風の霞の衣吹かへしうつめしき花ぞいろの那

後京極摂政家花五十首歌に　前中納言定家

霞たつみねの桜の朝ほらけくれなゐくゝるあまの河浪

題しらず　中宮大夫公宗

外日数らにふる春の山桜さきをしらる花の旅ゝ

文保百首歌奉りける時　前大納言為定

みよしのに雪ふりし桜さくかも山乃春ハ明ほのゝ空

春哥とて讀る　二條院讃岐

日にそへてたれかかきわけみよしのゝ吉野の山乃花ゆきの空

百首歌奉し時花

かゝりても花の限をたゝ雪ふりて雲とかさなるみよしのゝ山

權大納言義詮

にほひ人を

前参議為秀

桜花いさゝかなたの空の雲に雲たにかゝるきの山

右大僧正慈陽

咲初す絶まを何は山桜かさねくもれる嶺乃志ら雲

前参議為實

みよしのゝ春の桜咲ぬらし空より雪かみねの志ら雲

百首歌奉し時　前関白左大臣 良嗣

あらし吹く峨山に見てしは志らてや桜を雲にまかえん

花間鶯といふ事を

右大納言実教

雲に入松のけつゑも花の上に鳴くも本川にかよふ春風のせ

花ゝ匂ふ渡

壬生忠見

折り侘くかゝえる鶯の花の山乃桜を雪に見えつゝ

弘安元年百首歌奉りける時

入道二品親王性助

春毎に同しをのの桜のあなし…くさの花のあたの種

花に霞といふ事を

弾正尹邦省親王

山姫の霞の袖やうすからん色にそあまる花の白雲

春比寄花中に　後宇多院御製

春たけ川世や霞に匂ふ花の色を伏見の里にならしそめけん

百首歌よみ侍りし花

入道二品親王法守

我ならぬ人もなかりけり思はれぬ春の心を花におしけさ

文永二年白河殿にて人々題をさくりて七百首歌つかうまつりける時擁頭花といふことを

前大納言為家

言ふも又大宮人のかさしける花のさかりの春のなかはに

題しらす　大納言経信

百敷やみかきか原の桜花春しる人の折はさらめや

伏見院御製

おほくみし雲井の花を世にふりてなほ顧みる九重の春

正安三年二月廿七日日吉社に行幸ありて次の日志賀の山の桜をつけて内へたてまつらせ給ける

後宇多院御製

君か代にとはるへきみつまた志賀の山路にあへる春にはあふかな

かへし

後二条院御製

志賀の山風にさそはれ春にあひて君か御幸を花も待ける

暦応二年の春花につけて西園寺へたてまつらせ給ける

　　永福門院

咲ちるをしらぬへき宿の花ゆゑの春まてみゆきを絶え

　かへし

　　花園院御製

世をすてゝみゆきふりぬる宿なれと花もかはらぬ色にむかし思ひ（之イ）

弘安元年百首歌たてまつりける時

　　前大納言為兼

あはれそへ志賀の都はあれてこそ見し世は春の花の都なりけれ

嘉元元年十首歌合に山花

　　前大納言為氏

みよし野の花ぞむかしの春なから猶ふるさとの山とみゆらん

花歌の中に

　　後一条関白左大臣

庭は吉野のさくら咲いりいつ世の春かはこゝろなるらん

家の八重桜を内裏へめされけるにそへて奉りける

　　光明峯寺入道前摂政左大臣

花の名のむかしにかはる八重桜見せぬかさねも宮のにほひと

鳥羽院位おりさせ給ひて白河にすませ給ひける頃花

の頃しら白ゆき侍ける

　　法性寺入道前関白太政大臣

ちりまかふ花のこゝろやつきぬらん白河の花をみてもやとし春

　　百首歌よみし時

　　中園入道前太政大臣

桜さく花の雨ふる山もみなやとらぬものゝなき春風

桜の哥とて　　如願法師

花近く都をいでゝ桜色さへ深山の宿にとゞめてん

宝治元年百首哥に見花　　藤原光俊朝臣

尋て花を見るまは木のもとにすみなれぬる世をわすれけり

題しらず　　後宇多院宰相典侍

さそふとも絶ちる桜むらむら白雲てさそふすれさ花のなごり

三十首哥よませ給ひける中に　　法皇御製

暮れてゆく名のみ世に花の上までかをる小月の影のしづけさ

文保百首哥奉りけるとき　　権中納言公雄

桜さくたかねをかけて出る日の光の末の霞にぞ春

弘安(長イ)元年百首哥奉りけるに春月　　前大納言為家

あはれみる花の色ひの夕ぐれは霞の雲井にかすむ春の月

朝花といふ事をよませ給ひける　　後伏見院御製

何すみの小桜戸の明かたの花のかげ(月イ)

嘉元百首哥に花　　前大納言経継

あけぬるか花の色なる霞の雲の上さくら花の下風吹

中納言為藤

龍田山ゆふつけ鳥の声すなり花のみやまに鶯ぞなく

たゝすみ侍ける家の桜をなき人にかはりて

につかはしける

中務

色ならでなりけるこゝろもさそはれて散らぬさきにも見ゆる花かな

雲林院の桜を折りて或親王のもとへつかはすとて

源道済

又見ん人しなければ桜色いまは一えたをりてすなり

雲林院の女房のもとより雲林院の桜を折てこれはみや

と申侍ければ

後徳大寺左大臣

一枝の雨よりはあはれは植ゑや花は本を思ひてなるらむ

題しらず

よみ人しらず

一えたもをしむにたへぬ桜花あすまでの春はのこらじ

花の盛に桜のちりいさうける法蓮がもとに

つかはしける

藤原隆信朝臣

きえみえと見えし山桜のこずゑにかゝるしら雲やなに

題しらず

寂蓮法師

何をはさくらとそみん山のはに霧のまよひに世をすまぬ

前大納言為世家にていさゝか歌合侍りし時花を

十首歌読侍りし中に

民部卿為明

家づとに折りし花もいつかちる山ざくら

折花といふ事を　花園院御製

山ちいりてみんといひし風よりさきにたか桜をる

三十首哥よみ侍しに花　土御門院小宰相

さけはかつうつろふ色も有ものをとみてそ花を風にまかせし

百首歌たてまつりし時春哥　前関白左大臣

ちるものゝ心をしりて春風のさそふをまゝに根にかへるらむ

春の哥の中に　御製

晩風の枝をならさぬ春にたに思ふかさしに花やちるらん

文保百首哥たてまつりける時　後照念院関白太政大臣

花の香はさそひて行し春風をうらみしこのもやなれなき

題しらす　永福門院内侍

咲とくも散にみてもおなしかは花よりつらき春風

前大納言為世

山桜さかりの色の花の香にかすみの袖をかけよ春雨

源重之

吉野山みねとはさくらちりぬらしたちものほりてきゆる白雲

前内大臣

明けるかと山の末すゑかのみて花よりわかる麓なる雲

文保百首哥たてまつりける時

忠房親王

春の暮ゆふへの鐘のひゝきまて花よりほかをあはれとも思

朝落花を　後久我太政大臣

あけわたるをちかたなかむれはかすみにゝほふ花の朝風

落花留客といふ事を　俊頼朝臣

ゆく人をつなきとめてむちる花のちりしくとこのもとに枝を

文保百首哥奉りける時　六條内大臣

なかめつゝちるかひおほみ花の枝にみえてそ春風の

二品法親王覚助家五十首哥に落花

藤原基任

いさ桜ちるをつきにいひなして木すゑの花のおしさをそ見ん

永仁二年三月内裏三首歌に山路落花　伏見院新宰相

惜らんとかりの花をさそひて風のさそふ志賀の山こえ

堀河院御時中宮の御方にてめくらして花を植てつらねてそおほくはなかれてよませ給ひけるに

讃岐

庭清みたえぬ流の水の面に花の色をはひきそへてみる

春の哥の中に　従三位家

あすもこん花ちりしかは山川の水

河上落花といふ事を

前参議教長

よし野川花のしら波なかめれば峰よりおつる山たかの風

堀河院御時鳥羽殿に行幸の日池上花といふ事を講侍りける

法性寺入道前関白太政大臣

池水に花のかきをうつしてぞ波のあやさへ色たちにける

折花といふことをよませ給ける

後二條院御製

今日そ見る川のほとりの花を手折つゝあやめも神の宮とふにけり

百首歌奉りける時花

按察使実継

咲つゝく花の志ら雲かゝりけりあけまてとやへをこえし宿人

永仁二年三月内裏三首歌に山路花といふ事を

前大納言為世

雪とのみ花は志らねと川上にたちそふ雲の春の山道

二品法親王覚助家五十首歌に落花

前僧正道性

又やみん木の本風にかつきえてちりぬともなき花のしら雪

文永二年白河殿にて人々花をさくりて七百首歌

つかうまつりけるに暁花

後嵯峨院御製

ことはりの有明の月とみゆるかなそれともしらぬ山の花の面影

寛治七年三月十日白河院に行幸ありし小松か
まうけける日慶々翫花といふ事を人々つかうまつりけるに

贈左大臣　長実

白川のかたさりせは桜もちりにけりとやよそにみさらん

題しらす　人丸

春霞たなひく山のさくら花はやくみてちりもこそすれ

寛元百首歌たてまつりける時花

前大納言経継

あすも風ゆふへも吹なたにやめかさしの桜ちりなん

白河院北面にて花未遍といふ事を講せしにつかうまつりける

源中正

あさみとり春やこそのあたなるはのこさくらの花そみる

久安六年崇徳院に百首歌奉りける時

清輔朝臣

年ことにわかみのはなの花のすかたはかはらさりけり

六条の家にて庭のやうに成かはる桜をよみ侍りける

咲つゝまつり源為春朝臣折てとゝさきに申ける

中務卿具平親王

いつしかと咲てちりぬる桜をもむかしの春の志賀なりけり

宝治百首歌奉りける時落花

冷泉前太政大臣

山たかみ流れてあらしにさそはれてあまりなかれにちる桜花

紀貫之曲水宴し侍りける時月入花灘暗といふ事を
壬生忠岑
ちりぬれハ花の夜ハかけもみせそとをしみて月ハ入さらなん
桃綾水澄明
凡河内躬恒
水底のかけもうつろふ大かはのはなさきにみゆる春のよたふか
弘安元年百首哥奉ける時歎冬
常盤井入道前太政大臣
ちりぬとにゆきさそふかせもやらしの色にかはらし井手の山吹
二品法親王覚助家五十首哥に松下歎冬を
津守国冬
いく春ハ井手の下帯めくりあひてさく山吹の花を見ん

百首哥奉し時　関白前左大臣
吉野川岸うつ浪のたかけれハさける山吹ちりまかふらし
水色歎冬といふ事を
源順
河風ハふかすとも山吹さくさちりのみなせそうつろひやとる
二品法親王守覚家五十首哥に　皇太后宮大夫俊成
新川も井手の玉河底清ミ八重にやみえん山吹の花
恒徳公家の哥合に　藤原長能
底清ミ井手の河へにかけみえていはねかたかふ山吹の花

大井河にすみ侍りける比花ちりける頃なれはかへりし
人あまたまうてきて法門なと申けるをきゝてよみ侍りける
桜ちりまかひてしらぬ侍ける

ちりぬれは悔しきものを大井河岸のやまふきさかりなりけり

藤原季經

題しらす

左兵衛督基氏

あらし吹河瀬の水に影みえてちりぬともなき山ふきの花

入道二品親王覺誉

山吹の花の錦となる水に春の日数をとめつゝそみる

二品法親王道助家五十首歌に河款冬

西園寺入道前太政大臣

よしの河山吹の瀬々に春の花年さへなかるゝ水の間也

藤花を

道済

山寺の松にかゝれる藤浪は風なき松の浪とこそみれ

三條右大臣家屏風に松にさける藤を

貫之

藤花あたにちるとも見えぬかな松にかゝれるわたりなるらん

文保二年八月常盤井仙洞に御幸の時人々題を
さくりて歌つかうまつりけるに藤花

前大納言實教

なかゝ山松に寄るてふ藤浪の花のいろもはるの日数か

後京極摂政家百首歌に

宜秋門院丹後

花はよにあかぬ別はありとしもしらぬ人のおしむ春哉

山家暮春といふ事を

頓阿法師

うきはかり月日をしらぬ山里も花を限に春の暮ぬる

文保百首哥たてまつりける時

中納言為藤

花をちりぬるを惜むも捨ことはたゝ又あるたまの春の暮哉

入道二品親王尊圓

花の頃

とりせぬ山桜の花はちりてたにあかぬ堤に春そなき

百首歌奉りける時暮春

等持院贈左大臣

花のこる風ちりそらにさそはれて日数もつもるの暮ぬらん

文保百首哥奉りける時

前大納言為定

ちる花のあとに日を送りつゝてやとる春は暮ぬらん

嘉元百首哥奉りける時暮春

前大納言為世

行むとて今日の日数のかきりはかり春は暮ぬらん

新拾遺和歌集巻第三

夏歌

更衣の心を　後九条前内大臣

夏人の袖つき衣けふかへて夏きにけりとたつたの山

家に百首歌よみ侍りけるに初夏の心を　等持院贈左大臣

昨日にはかはりてけふは人の衣のいろにそ夏をしるかな

首夏といふ事をよませ給ひける　院御製

なつ衣かへしかひ山の峰のゆきけさは卯の花侍るらん

百首歌の中に　進子内親王

夏衣たちかへてこそをしまるれなれし春の花の袖

二品法親王守覚家五十首歌に　従二位家隆

なれきつる春にわかれし花の香はなほ身にそへて夏衣かな

題しらす　法皇御製

うつりゆく夏人の袖にはあれと花たちなれし夏衣かな

花さかぬ梢をみれは吉野山春にはたれかさそふなるらん

よみ人しらす

夜浅き春来ぬ山の朝霞花にうつりて春そ暮ぬる

従二位為子

文保百首歌奉りける時

中納言為藤

吉野の山かけにかゝる行雲の末すゑは花の陰よりみえしに

夏歌の中に

衣笠前内大臣

ほとゝきす山のはよりやゝ春の日数に花のさかりなる

嘉暦四年御着帯の後朝の月朝餉の御几帳

に琴のかきたるを御覧してよませ給ける

後京極院

ゐかけにかさゆふさめあかて引筆のかけに見ぬかな

上西門院琴ひくときゝて待賢門院堀河

らせ給ひけるよふけにさそひて新院の女房に

中に琴よつけて遣しける

ひとかたにためしいかにしりてか二琴ならす千世を契る

祝

崇徳院安藝

二琴ならす千世をしらぬそこにみそ声あはすらんたえぬ契を

糸の緒のたえぬとも絶し事をわかひくそかしる

後宇多院宰相典侍

忘てもよいかゝきく山の琴の音かけむかしに絶さき世をも

百首歌奉りしとき郭公

入道親王尊道

かたらひし琴の音あやめことまてたゆや思ふ

貞和二年百首歌奉りしとき

民部卿為明

なへて世にまたさかぬ時なるさそ思ひそやりしまらん

題しらす

昭慶門院一条

志のひ音をまつにかけてそ待きゝてそ人のきかぬ鳥のなく

文安六年崇徳院に百首哥奉りける時（久元）

左京大夫顕輔

今はとて侘しきあまりのそら寝きゝてとなくてもあはなれ

百首哥奉りける時

関白左大臣

さくらのみ人にしられぬ若葉さくとぞ見えけるいつまでも

夏哥の中に

三條入道左大臣

続古今にさなへをうゑしかたにかゝるしづのをたまき

寛治百首哥に　待郭公（れい）

従二位行家

風よりもなほ音羽の宿の時鳥まつかひもなくさつき月のくれ

題しらす

前参議雅朝

あけ方の月影さそふ時鳥なくや雲ゐのはるけき声

延喜十四年十二月女四宮御屏風哥に

貫之

月かけにあやなく声をあけてなく時鳥かな

菅家万葉集哥

よみ人しらす

人まちし山やまけさ河るなかの夜を明て帰るかな

文保百首哥奉りける時

後西園寺

三條入道前太政大臣

つれなさのたくひあるをもしらすして有明の月にかへるあさ露

嘉元元年十五首哥合に暁郭公といふ事をよませ

給ける

順徳院御製

あけぬとておもひそてしもやすらひぬ子規まてる夜の月になくらん

題しらす

後深草院少将内侍

山のはの月にまたるゝ郭公のこゑをはきかてあけぬるよはかな

建武二年内裏にて人々に哥よませさせ給ける時首夏

郭公といふ事をよませ給ける

法印浄弁

郭公鳴くをきけは山のはにまた一声の月そのこれる

百首哥奉りける時郭公

前大納言公蔭

なくこゑをひとこゑ山のはに月のかけなる郭公かな

夏哥の中に

安嘉門院大貳

あふさきるまてにひとつもかけもあらはひらかぬ空の

後鳥羽院御製

さのみやはなかれむ月の郭公まてる夜のまに一声もなし

法印覚源よみ侍りける日吉社の哥合に

前右兵衛督為教

関ちにいかなのかなりの時鳥雲乃ちやと残けりる人

題しらす　前大納言忠季

郭云深山乃ゝまをおりつゝ二声のあとそはおそく(?)かゝる雲

法性寺入道前関白太政大臣の時乃百首哥に

源仲綱

むら雲にならひて時鳥(?)むしまゝてる声みをこそ惜

ある所の哥合に人にかはりて

藤原道信朝臣

さ夜深て寝覚てきけは時鳥たそかれの森やいはへる人

百首哥奉りし時郭云

前中納言有光

橋姫のかたしく袖や時鳥(?)のむ山まちて川(?)待そうらん

建仁元年鳥羽五十首哥合に山暁郭云

前中納言定家

郭云山の志浦によたちぬれてまつ川と床(?)さやあかつき(?)の声

光明峯寺入道前摂政家百首哥に杜郭云を

津の国の生田の杜にまちかねてまたいつはりの声をきくらん(?)

題しらす

源信明朝臣

郭云きくらくとこきけはおのかきの杜もまつ(?)の宿を(?)ならし

大江頼重

ちかはけ(?)なくさそ郭云まつさ月にあるやきこえし

嘉元内裏にて三十首哥めしし時

法印定為

五月ふかくてきこえし郭公心のほとりかとぞうちみめ

百首御歌中に　花園院御製

都へさこそ鳴らめかよふときは涼しかの友な忘れそ

百首歌めされし時よ郭公

御製

あけぬれば夜ふかく郭公いかにきこえけり

応和二年五月四日庚申夜内裏歌合に郭公

大納言延光

あやめのひとかつてきても時なるあやめにかかる袖

題しらず　祝部成久

あやめ草五月の時なる袖にかかるさほやなる

前関白左大臣

郭公そのさ月の時しもあやめかりてや宿りなるらん

[illegible]早苗といふ事を

従三位氏久

とりあへてさけの野沢の夜草は

題しらず　平宣時朝臣

宇多の浦風あはせて湊田に鶴おほあまや早苗とるらん

二品法親王覚助家五十首歌に早苗

津守国冬

里ごとに山田のさ苗かへるさはそれとやゆふ

松ひし早苗

弾正尹邦省親王

昔見し野をはすこと山田にハいつの萬や早苗とるらん

元弘三年立后の屏風に

藤原雅顕朝臣

はやきさけ杉の浮田の五月雨に袖ひちあへすとさなへ取也

題しらす

後二条院御製

山かけや田子の小笠を吹風もすゝしき暮に早苗とるなり

赤人

風ふけは花橘を袖にかけ君かためにとをりも今なれ

嘉元百首哥奉りし時盧橘

前大納言俊定

去ら袖の名残をとめて橘のむかしかたみの香にかほるらん

百首哥奉りし時卯花

徳大寺前内大臣

袖の上にそれとみゆるはたちはなの色ひとつにも昔なりけり

按察使資継

しのふるをこゝろにのこすねやのむかし花たちはなのそてのかほるら

三十首歌の中に

法皇御製

何ふるき遠き衞の昔をはかふるきにもかはるとも袖の香そせむ

光明峯寺入道前摂政家百首歌読侍ける盧橘

前中納言定家

さくら花袖の香はうつりけりむかしの人のならはれける　兼教

題しらす
土御門院御製

ふく風はむかしのまゝや匂ふらん久遠の花のうちたちむ
式乾門院御匣

いつまてか我こそ惜しむ梅の花さくらにほひのこりむかしを
嘉元百首哥奉ける時梅
前中納言雅孝

むかし誰袖の香やとゝめけん風にうちちる花のさくらも
題しらす
従三位為信

たち露もむすひし袖の香はしるし此まつにうつる花
平氏村

郭公まれなむちの声をこそさはかしきものかな
左兵衛督直義

かけはなつきれさ物をいはるゝかなやさ月とまちしかひなし
建保四年百首哥に
常盤井入道前太政大臣

うき雲に声をいのちむ郭公さ夜更れは山のは
雨中郭公といふ事を
後京極院宮内卿

月影にあはれたゝ又月雨の雲のいつくかとまらむ
題しらす
法印定円

五月雨のふるえにむかしの袖やしのふらむ雨中郭公

堀河院御時百首歌に五月雨

河内

さみたれは入江のまこもかりかねていつみの浪に漂ふ宮(?)の

百首哥奉りし時おなし心を

権大納言義詮

いかなれは河波高くみゆるかな六田の淀もさみたれの比

河五月雨

藤原信實朝臣

五月雨は宇治の渡りも岸こえてあさや山路の瀬々の白浪(?)

寛元百首哥奉りける時河五月雨

後照念院関白太政大臣

雲くらき杜もかくるゝ五月雨に宇治の川長さほさしかねつ

橋五月雨といふ事を

藤原基任

五月雨は水のたかはしきのふまてかよひし道もなかれはてけり

文保三年百首哥奉りける時

前大納言為定

名とり河せゝの埋木さしつゝもこゝろもしらぬ五月雨の比

河五月雨を讀る

権中納言具行

晴まなくふる五月雨にあすか川渕も瀬ならぬ世やなかるらん

寛元百首哥奉りける時河五月雨

一條内大臣

渕も瀬もかはるならひのあすか川きのふの渕のけふの五月雨

百首哥たてまつりし時郭公

右大臣

五月雨の雲のたえまの夕日影さすかとすれはやかてくれぬる

弘安元年百首哥奉りける時

後久我前内大臣

さみたれは峯の松風もうすれにき五月雨の佐保の河原の沢の夕暮

正治二年百首哥たてまつりける時

前大僧正慈鎮

五月雨は富士の鳴沢水まさりてとやはかりけむたかねさらなん

題しらす

祝部行氏

時しらぬ山とはきけとさ月まて雪や富士の高根にのこれる

宝治元年十首哥合に五月郭公

前大納言為氏

あやめ草かをるのきはの郭公さ月きぬとやなのりそむらん

平忠盛朝臣家にて人々よみ侍りける閏五月廿日比

やつれける

神祇伯顕仲

何屋やさしさ月はかりとおもひけむ山ほとゝきすなきもやまねは

百首哥よみ侍りける時

崇徳院御製

さ月山木の下やみにともす火は鹿のたちとのしるへなりけり

題しらす

前中納言基成

とりすゝむさ月の空の五月雨に雲とかゝれる山のはのゆく

文保三年百首哥たてまつりける時

中納言為藤

こよひはた大井の山のかけ出て鵜舟のかゝりたえやらん

左兵衛督基氏

鵜川すゝし露の夜たゝぬせゝのかゝりひあかすかな

元弘三年立后屏風に

前大納言為世

山里の鵜舟とみえし夜半のかゝり火たえにけるかな

藤原盛徳

石はしる瀬々の鵜舟のかゝり火はとけぬ氷のかけそやとれる

二品法親王覚助家五十首哥に河篝

鵜舟さす棹のしつくもとなるほたるのかけに波や立らん

権中納言公雄

大井河の鵜舟をそみえく

道命法師

久方の月の桂もちかけれは星とそみゆる鵜川のかゝり火

二品法親王覚助家五十首哥に鵜川

前大納言実教

鵜河の鵜舟のかゝりさしかへてよるの河せを照しつゝ

文保三年百首哥たてまつりける時

中宮大夫公宗母

大井川せゝに鵜舟のかすそへてそれとも分ぬかゝり火の影

元亨三年八月大覚寺殿に行幸ありて人々題を
さくりて歌つかうまつりけるに渡河待恋といふ事を

後宇多院御製

うらみ侘ひたえぬかかりいやまの河瀬を絶なからん
なそこのさけかさへのりこへ渡りつらく

伴揖

見ちのとめる床夜の露にさはに涙すさやきえなるらん

題しらす

式子内親王

日暮のには急ともいひ先つ待まて露の命やうきをしれ

皇太后宮大夫俊成

雅かまくにすむ露とも見えぬかな葦の下葉に風ぞ吹ぬ

建保四年閏月五首歌に

後久我太政大臣

水上や久しくもなし山河の岩ねにあまる瀧なきかな

夏の歌の中に

後醍醐院御製

かつらきや高間の山にかかる雲のよそにたちこそ夕立の空

名所三十首歌の中に 信太杜

伏見院御製

冬のはのひろきし宗の信太の杜の千枝の夕露

題しらす

一すたおのこゑたえまを吹越て夕かけしおろ風涼しき

伏見院世尊寺

なる神の声かすかなる夕立のくものかたより風そすゝしき

野納涼といふ事を

入道二品親王覚誉

雲かゝる夕日は空にかけろふのをのゝ浅茅生風そすゝしき

三十首歌合に夏夜

後伏見院御製

草ふかき浅茅か露に月見えてほたるかすかにてらすなり

百首歌中に納涼

等持院贈左大臣

呉竹のよなへくちかやちるらん夕暮の風の音に涼しさ

元弘三年立后屏風に[illegible]

前権僧正雲雅

夜々たゝぬ神のすゝしさにむすふともなき井手の水

夏をわするゝ世の行末

後二条院御製

月かけは浪のうへにかけとめて天の河原なかれ行らん

嘉元百首歌たてまつりし時納涼

前大納言為世

結ふ手に涼しくみゆる月のひかりにやとくあけぬらんよは

[illegible]

左原葉平朝臣

夏の夜の月にあかしの秋風もあなしの里に住なれし

白河殿七百首歌に夏月似秋

前大納言為家

明やすき夜はのまにまに月影に蝉の声する杜の木隠

題しらす

前大納言実郷

明座ときこゆるひくらしのふかき絶間の月に鳴声

藤原為継朝臣

いつよりて秋やとなきし蝉の声世もすからなる夏の夜の月

寛平御時后宮の歌合のうた

よみ人しらす

蝉の羽にひきかはす松風にたちてもたゝぬ蝉の声かな

題しらす

俊恵法師

山ふかき杉の木陰の夕くれにひさすゑや思ひの蝉の声

和泉式部

いかなるの折にまし秋てあさの露ちる蝉の羽ころも

百首歌奉りし時夏歌

藤原行輔朝臣

よる瀬なきころもかなとそ松の葉も秋大ねきかれ夜そ寝く

進子内親王

松はおきや庭のゆふてらす日のひかりすきかへる蝉

前内大臣 實

涼しさはすゝしき松の下陰にやとる蝉やなきあかすらん

文保百首歌の中に

後西園寺入道前太政大臣 實兼公

さゝ波もやかて風こそすゝしみ桜川夕浪かけて秋やきぬらん

新拾遺和歌集巻第四

秋歌上

貞和二年七月七日より御かのことゝ三首歌めされける次に早涼知秋といふ事をよませ給ひける

法皇御製

秋きぬとおもひもあへぬ朝けよりはしめてすゝし蟬の羽衣

早秋の心を　権大納言義詮

蟬のなくもりのこすゑにたえ〳〵に吹そめて秋の森の下風

二品法親王守覚家五十首歌に

従二位家隆

蜩の鳴夕日のかけそ悪の蟬のなく松も秋をしらするなり

寛元百首歌奉りける時初秋

贈従三位為子

涼しさのあさけの袖になれぬるは浦風よりも秋や吹らん
秋としもなかなかにいはれて知られける

西行法師

吹わたる秋まだあさき松風に今宵なかむる雲そらの月

大納言経信

大井の河のかは波に秋はきにけりなほもの日のあさの河風

千五百番歌合に

後鳥羽院宮内卿

秋やとき松の木すゑにかよふともそでにしらるる秋の初風

初秋の心を

弾正尹邦省親王

あすよりの風とや吹かんたそかれの袖にもしるく秋や来ぬらん

前中納言匡房

音もせぬ宿とふらんはつかりやおもとにちる萩か花の上

後京極摂政前太政大臣

吹く風に秋の来つつも山下の露やそこにちりぬらん

二品法親王寛尊

いとせめて露とみえける玉ちるは守の大原の萩の初風

百首歌奉りし時

徽安門院一条

秋来ては朝けの夕風に袖かけて露をきぬらん

堀河院御時百首歌奉りけるに荻

基俊

誰となくむつる宿は秋きぬと萩の下葉にさかりなる覧

題しらす　　式乾門院御匣

いつもはや萩の下葉も我からに風の音にも秋とまつらさむる覧

中務卿具平親王

秋風のすさむ萩の下風にぬれた毎はいかそら露の玉とちる覧

百首歌めしける時萩

御製

吹きそむる風も萩の下ふしを知らるかとおもふ庭の秋せ

等持院贈左大臣

袖の上にたえぬ涙の萩の下風ふかたまる秋の上露

秋歌中に

達智門院兵衛督

むすひ置れ秋の萩をも志りそめていけしをなすこの露に成覧

嘉元百首歌奉りける時初秋

園光院入道前関白太政大臣

秋きぬと枝ひきあへぬ萩原にまたなれもこに露やちる覧

題しらす

菅原孝標朝臣女

秋来ぬるそこともしらぬ山里の枝に萩の下風を吹く

七夕

躬恒

秋来ぬる天の川霧たつ時や七夕つめの思ひなるらん

赤人

銀河かけてきこゆる星の七夕つめを秋あひつらし

貞和二年百首歌奉りける時

後思屋前関白左大臣

さき秋の今さき契りはなと七夕のくもの衣やかさねらん

同七月七日三首哥講せられけるに七夕契久と云事を

前関白左大臣 冬教

いく秋をへぬちきりや七夕の絹はかひあかひく秋なからん

百首哥奉りし時七夕を

入道二品親王法守

九重の庭にこそ秋なく星あひのうき月のかけて

題しらす

従二位行家

いくとせをちきりてや七夕のちきりたえせぬ契り常

貞和二年七月七日三首哥に七夕契と云事を

前大納言経顕

織女のまれにあふ秋をまちいてやなかさむあすの涙

七夕地儀と云事をよませ給うける

院御製

天河とわたる舟はさけはなとわかれてよるの秋もさきかり

百首哥たてまつりし時

前大納言忠季

かさねても惜やさきの七夕の秋のまれなる雲のかけはし

題しらす

源義氏朝臣

いつのまにわたせる橋をわたるらんまちてあさきの星合の空

中務卿宗尊親王

天河わたる中小舟あまたかよひゆく鵲のはし

後二條院御製

いく秋かたえぬちきりを天川とわたる羽かさゝき乃橋

元弘三年立后屏風に七夕

前参議経宣

七夕のやそ衣かさねて秋のひとよをなかにみん

秋哥乃中に

前大納言為家

織女の雲乃衣をきみかためかけてなかるゝ天の川浪

内大臣

七夕のあふ川きしにつなきたる舟こそとはぬ契なるらん

千五百番哥合に

皇太后宮大夫俊成女

風ふけは志のゝみちのかけやそよくらんゆふ日のさしに露こほるらん

題しらす

前中納言長方

冬きぬと荻の葉風のさそへとも秋のなこりの露そのこれる

瓔子内親王

風ふけは玉ちる野への夕くれに露をかけてそ秋のかなしき

雲居寺瞻西上人坊にて哥合侍けるに

輔仁親王家甲斐

野へに出てみれはたゝゆるかすみの露吹むすふ秋の風

伏見院に三十首哥よみ

従二位為子

さを鹿のつまとふ野への露わけて小萩か末は花そこほるゝ

百首御哥に　月花門院

ゆふされはたまもかくれぬ萩の花をしなへて露やおきまさるらん

秋の哥の中に　法皇御製

ひとりすむ萩の戸ちかくあけてけり月のかつらの露のしら玉

秋の花色をとりてうつすてふ人の心の露そかなしき

みたれつゝ

中務卿具平親王

千草なる萩のわかえを枝ことにうつしてみるも人のことのは

題しらす　よみ人しらす

鶉なくいは田の野への秋萩にたえすふく風をとふ人のなき

建武二年内裏千首哥に　秋植物

法印隆淵

文保百首歌の時萩をよみ侍りける神のことをおもひそめける萩の花すり

文保百首哥奉りける時

法印定為

萩の花をりてゆふへやきぬにかへて秋の風にまかせて

題しらす

人丸

秋風はすゝしくなりぬ萩の花さかりになりて露ぞこほるゝ

まさに見るこそ見しか萩の花さかりにをりてかさん

中納言家持

わかやとの萩の花さかりに見る人の袖の露や秋風にかせ

百首哥奉りし時萩

前大納言公蔭

さらぬたに志をるゝ野への萩かえも夜りすゝむしちらまくをしき

月前萩といふ事をよませ給ける

御製

あさ霧の露ちらぬ萩のさかり夜は月をも都にみるらん

建長二年鳥羽殿にて野草花を

前大納言為氏

唐衣すそ野の草葉に志ら露のむすほゝれたる萩の下紐

秋哥の中に

皇太后宮大夫俊成

秋乃野はいろを志のふのみたれつゝ若草袖にも萩やみたれん

貫之

女郎花匂ひを袖にうつしてはあやなく人やわれをとかめむ

堀河院御時百首哥に

基俊

あきの野の心を志らぬ旅人はあきれかほにてとをるなり

久安百首哥合に

二條院讃岐

女郎花秋の色あひをとふ人にあまた風にもなひくなるらん

題しらす

清原元輔

なにとなく花の中なる女郎花たれゆへ野へに人のまつらん

法印実性

ほのくさき籬のまともはらはてもしけきかのこるらん

膽西上人哥合に

堀河院中宮上総

数ならぬことをも待か萩すゝきなく虫の浅茅か露に涙そうかる

秋の歌の中に　　伏見院御製

露おもき籬の草はかれ〳〵に秋の色そふ夕くれの空
ふかき夜の籬の虫やなくらむ人の心の秋をなけくか

太宰大弐高遠

野辺あけて萩の錦に出ぬらんたちかへりても露の枯葉

邦世親王

風さはく草の末葉の花薄おもふにたえぬ袖の神とそみる

伏見院に三十首歌奉りける時草花露と云事を
侍ける　　九條左大臣女

夕霧の野辺のひかりに秋風に千草かつゆそ花の上露

杜萩の心を　　好阿法師

萩の上に露とおくやの玉井には風のうへに秋の宮人

白河院にて羽林に萩を野草露といふ
事を　　修理大夫顕季

うちなひきわたる秋萩の末ことに宿れる露はむすひけるらん

題しらす　　前中納言定家

霧わけておりの宮ゐのはなすゝき秋をしれりや浅茅生の里

權中納言宗經

浅茅生やうへをもしてそ枯野とは成にける哉秋のしられん

上西門院兵衛

老らくのまたなかにける萩の花露けきかたに出まつ覧

梅壺女御

いろ色の雲へつまかへしてひとつならぬむら時雨

関白前左大臣

さらてたに物思ふ秋のそらをしも限なき夕をまたとあき風そ吹

惟宗光吉朝臣

さそなおもふ露の名残みえねとも浅茅生のをのゝ篠原秋かせそ吹

岡屋入道前摂政太政大臣

あきされて霧やたつらむみわたせは野原の末に秋風そふく

文保百首歌奉りける時

正二位隆教

あらち山夕霧ふかし秋風に矢田野の浅茅か露をたゝ吹

百敷のうちくらき世ゆくえとそ秋かきさる花やかなる

よませ給ける

花山院御製

秋とこそ草葉の露をおきそへて袖にもやかてなるらん

前大納言為世

あくかれの露とそなれもゆきのの末の篠とやなむ露はるゝ

亀山院御製

秋ことに袖は浅茅か露ふかくやとるも月のいかなるらん

弘安百首哥奉りける時

前参議雅有

ゆふされはやまゆく秋風にさそはれて露の浅茅生

建久二年内裏にて待月といふ事を詠せ給ける

従二位家隆

月ゆゑに身をはしのひも情なき心に夕くれの空

題しらす　前内大臣

そらすたに雲吹はらふ月影のいさよふ嶺の秋の夕風

貞治百首歌奉りける時山月を　後西園寺入道太政大臣

あま川空きよく吹く嵐の山の端ちかき月の影かな

百首歌中に月　進子内親王

秋風の横雲ながら峯に雲とかはらぬ山の端の月

文保百首歌奉りける時月　前大納言為世

嵐吹く峯のむら雲きえもせて雲のかゝる松の尾のうへに月影

嘉元百首歌奉りける時月　中納言為藤

たかま山松の八乃種や深山にいさよふ雲に洩る月影

康安二年九月十三夜人のもとにて題をさくりて歌よみ侍りしに月前雲といふ事を　民部卿為明

なかつたゝよふ雲をさそふ月の光をまちて立まよふ空の秋風

題しらす　後法三宝院入道前太政大臣

出そむる月のひかりは足曳の山乃木の間もあらはれにけり

暦応三年八月十五夜仙洞にて三首歌講せられし時

空に月出山といふ事を

従三位経有

宮木もりまたきたえにし嵐にて松原川に秋の夜の月

寶治元年十首哥合に海邊月

冷泉前太政大臣

和歌の浦や難波の海の夕なきに葦の末葉をわたる月影

題しらす

刑部卿頼輔

稲田原しくれは宮ともみえて雲の浪よりいつる月影

後醍醐院御製

風わたる門田の末の露晴ていな葉のうへにもれ出る月かけ

普光園入道前関白左大臣

いはし水光さしそふ秋の月今よりのちの代々のまもりを

寶治百首哥に山月

山階入道前左大臣

君か代はとほ山をいてゝよりのちの月も空にかゝらむ

百首哥奉りし時

右衛門督為遠

久方の空にも雲のはれ初てまされる世々のみちの月かけ

題しらす

大江貞重

谷ふかきそこまて秋のなかまてひかりみる月のかけやはし

前大納言俊光女

松か山の雲のはてまて秋の夜の更ゆく空にすむ月のかけ

正三位知家

わかのうらにしほみちくれは月影のひかりさしくる枝そやとれる

月百首歌読侍ける

二條院三河内侍

月をみるゆふへにおもふ我なれや大かたの秋の梢なりけり

宝治二年百首歌中　三條入道左大臣

ゆくかたやとまる椎山の月なみ柞のやとりに深く宿らむ

名所月と云事を　土御門院小宰相

志賀のうらのさひしき波の神まつる秋の今夜の月をみるらん

百首歌よみける時

大納言為家母

見ぬ世まてのこさぬ旅の月やむかしの影をたとらん

寛元百首歌よみ侍りける時おなし心を

権中納言為雄

雲の上になかれむかしの月をまてやするとも月ならぬをそや

建長二年八月十五夜鳥羽殿にて池上月と云事を

おほしめされけるによませ給ける

山階入道左大臣

秋の月もろともにすみにけりてふ風すめる池の宮の池水

後嵯峨院御製

蓮葉の玉とそみゆる池水の上にひとすちの秋の夜の月

秋月をよませ給ける

土御門院御製

大井河志もは桂の月かけりみなきて松川の
瀬の志ら玉

新拾遺和歌集巻第五

秋哥下

題志らす

後嵯峨院御製

秋はゝいつく幾代へぬらん松にひさしき秋の月

俊恵法師

すみのほるらんや空にたらそひとしく秋の月に影そあるらん

伏見院に月十五首哥奉りける時

為道朝臣

吹まよふ夜嵐のおとにあらはれて木の葉かくれの月の影かな

三十首歌めしける次に

伏見院御製

秋風の関すきまちかく吹なへに涼くすめる庭の月影

建仁二年石清水哥合に月照海と

前中納言定家

あきにはり極くむあきは比庭宗之神も月屋とるまて

秋哥中に

太宰大弐重家

ゆふ月小浪の上にうきを屋とうつる月をあはれやとまりかねけるらん

前参議家親

凡わたせはいつくはあれと秋の夜の月はすむへき志のたゝ秋のけしき

入道二品親王覚誉家五十首哥に

源頼康

みなせ川にしほひのまよふ月影や似てゆくすゑをかたるらん

家千首哥に月

前大納言為家

あまの原光そふかき秋の鏡とみゆるあきの夜の月

題しらす

中務卿宗尊親王

久かたの月影さむし鵲のわたせる橋に霜やさゆらん

文保三年百首哥たてまつりし時

前中納言實任

いにしへのますみの鏡代々かけて神路の山にすめる月かけ

正和五年九月十三夜後醍醐院みこにておはしましける

時五首哥よませ給ひしに月前松風

中納言為藤

あらしの山のたえまもる月は松にて風のおとそ更ゆく

秋歌中に　　鎌倉右大臣

天原ふりさけみれハ月清ミ秋乃夜いたく更にける哉

藤原為葉

難波かた芦まをわくる舟のをとさへすめる秋の夜の月

従二位家隆

真野か浦に鶴なく雲は波かゝる芦辺はすめる夜半の月

入道二品親王覚誉家五十首歌に

前参議定宗

名にたかき秋も半の雲はれて空そさやけき今宵の月

水上秋月と云事を

二條太皇太后宮摂津

池水にうつる影ものとかにて秋の夜すめる月影

建長元年九月十三夜鳥羽殿にて池上月と云題を

つかうまつる

前大納言為氏

たかきさへ汐の光に千世をへて秋なき池の秋の月かな

題しらす

源有長朝臣

白河の関守乃さくる月清くいつくもとめて浮雲もなし

建仁三年仙洞十五夜歌合に河月と云事を

後京極摂政前太政大臣

大井河みなもの秋は龍田河月乃こほりにあらしふく也

題しらす

法印浄弁

杉たてる門田の面の秋風に月かけさむき三輪の山もと

安嘉門院四条

露霜にうつりくる月をかこちても名残の庭に(?)秋(?)をしる

入道二品親王覚誉家の五十首歌に

法眼行経

いはりきえぬ(?)人の月影にうつるみつ(?)露の玉

題しらす

道済

誰すみてあはれしるらむこえ山杉の木の葉(?)に出る月

清原深養父

草も木も色かはれともわたつうみの月は誰(?)すみ(?)…

前大納言頼経家にて月十首歌よみ侍けるに

真昭法師

月影のさしもあかりし高円の松の葉ふかくあはれなるのそ

法性寺入道前太政大臣月の歌あまたよませ侍るに

よみ侍る

清輔朝臣

数ならて我すむ宿に出て月影たえはゆること(?)もなし

海辺月を

よみ侍りし

こゝろへきさかりとなりて清く出る月はかりの枕なるらん

難波のは月見ぬほとそ年前(?)のらく待(?)つゝ海上

前大納言為世

暁月といふ事を

浪の上にうかふ月のかけさえて生駒の山に(?)…

中納言為藤

難波人入江にちかき月かけによるなみ(?)奥津しほ風

題しらす　法皇御製

秋風の夜床をさむみ(?)ねさめして月かけにさそふ(?)

春日社歌合に暁月といふ事をよませ給ひける

後鳥羽院御製

足引の山路の木すゑ吹風に(?)ねさめ夜ふかき有明の月

題しらす　寂蓮法師

野への(?)風にちりかふ(?)梢より(?)もる木の葉に(?)有明の月

建保二年内裏秋十五首歌合に秋雨

大蔵卿有家

日くらしの鳴夕暮の浮雲にしくれてそそく(?)秋の下草

建保四年内裏歌合に

正三位知家

むらしくれならぬ山はけや(?)夕日に残る(?)峯の白雲

秋の歌の中に

後鳥羽院御製

秋風や志賀の浦浪に吹あらし(?)なみの音さむく(?)夕暮の色

正治二年百首歌たてまつりける時

後京極摂政太政大臣

みしれ(?)芦のかりねの(?)風の音(?)もよりそふ(?)秋の(?)寝覚(?)

鹿を　御製

さらぬたに思ひつきせぬ(?)田のほとりにまつ(?)しかの音ちかき(?)

建長二年九月鳥羽殿にて野鹿といふ事をよませ給ひける

後嵯峨院御製

秋の野の花の錦をこよひ月をいけはかゝみに見えし

寛元内裏三十首歌に

法印定為

むすひおく野辺の露にたちぬれて我と月や宿らん

秋歌の中に

左兵衛督直義

月影の入野の末にすみわたるひさしきあかつき霧に庵そやとれる

後醍醐院位におましましける時八月十五夜歌講せられ

けるに月歌

前大納言経継

高砂の松の上に(?)月はさやかなる庚の声もきこゆる庭の[illegible]

百首歌たてまつりし時

権大納言義詮

住よしの浦やたゝよふさゝ浪の影の月のそむ露とかそなん

松の一むら

西行法師

影くらん心のいとゝすみぬるは月のさやけき[illegible]

元亨三年九月十三夜清涼殿にて三首歌講せられ

ける池辺月

中納言為藤

小倉山秋のあらしにひときは錦の月のうつりてすみまさりける

建長二年八月十五夜鳥羽殿にて暁月といふ事を

つかうまつりける

前大納言為氏

つきせぬのためしにやさしと書あらし山のみねの月

弘長元年百首歌たてまつりける時

常盤井入道前太政大臣

なかめやる山のすそのゝ松原に夕日をそへてやつまをこふらん

萩し原

六條入道前太政大臣

鹿きほふ山の尾上の松風に萩のまくらならさぬ鹿の声

左近大将師良

鹿の鳴声ふきこゆる夕霧に外山の尾上すみわたるらん

嘉保二年九月殿上詩哥合に朝霧

権中納言通俊

山里は霧たちこめて人も見ぬ野辺に鹿の音を聞きて

萩し原

源家清

さそふらん鹿の声をも松風に吹よせてたつ鹿の鳴らん

西園寺内大臣

山里の鹿なかぬよの霧の籬にあはれ友とや人はきくらん

小野小町

清き秋かせ吹に鹿のねをきゝてそ秋としられける

入道二品親王尊円

言の秋の松を友とはなすさまて鹿こそ鹿もなくなり

増基法師

秋風は松の木すゑに吹風の音にまかせて鹿も鳴なり

四條太皇太后宮哥合に鹿を

康資王母

夕されは秋こそ鹿の鳴ならし花のたもとや妻なかるらん

野庵といふ事を　藤原雅家朝臣

谷ふかみそま山かけの節花おほる野人のさとのかすかな

従二位家隆

さか峯の松も千年の草の庵をかさねし山風さむき野の京

前参議経盛家歌合に

清輔朝臣

庵の結ひ時雨ただ関ゆふはおくやまのたつねとぞあらん

二品法親王覚助家五十首歌に夜庵

従二位為理

我宿に書やありつる足引の山かせかよふ庵の柴戸

弘安元年百首歌奉りける時

冬されは田面のいほの露ちらしひさき山おろし峰せて吹

前大納言為氏

百首御歌中に

花園院御製

山田もる田面の稲葉末とほしなひきてたそよ秋風そ吹

百首歌たてまつりし時秋田

中園入道前太政大臣

白露はのこるこのかけの晴れて庵さしむ秋の山本

文保三年百首歌奉りける時

権中納言公雄

明わたる山もとに晴て田面にたなひく秋風ぞ吹

久安百首歌に

上西門院兵衛

まかく法の中に鳴声も明る蓬が杣に秋や更ゆき

永仁元年八月十五夜後宇多院にて十五首歌合に

大蔵卿隆博

秋虫を

秋をへてなれし枕のきりぎりす涙やいかにかはらぬの夜な夜なとを

題しらず

順徳院御製

浅茅生や床の草葉の蓬なくねをきゝつる聲へのきりぎりす

前参議為實

虫の音は浅茅が露にうつ枕よそに秋の心のあはれ有明の月

前大納言為世

きけばかやうに枕によるの浅茅原虫のこゑのみまさる露けさ

文保百首歌たてまつりける時

後光明照院前関白左大臣

秋ふかきあさぢが庭の霜の上にかれても虫の聲ぞきこゆる

中納言為藤

夜を寒み枕ゆふべの草葉よりよわりもはてぬ虫の聲かな

月前虫といふ事を

讀人しらず

かげ月の光の[illegible]きこえしぬくよわる松虫の聲

家久千首歌に

彈正尹邦省親王

[illegible]秋風よ吹[illegible]や夕暮の聲[illegible]

寛和元年八月十日殿上にて虫合せられける

花山院御製

[illegible]

秋れは清見か関にゆくすゑも鳴わたるなる

題しらす　　信明朝臣

行人はいまはつきぬる雲路にかゝるこゑきこゆ鴈の

延喜御製

秋風を吹きりよりけふ今はかけ鴈の声をそきこゆ

中納言家持

雲かくれ鳴はきこゆれ鴈かねを見すてゝかへる守山のをちかた

後九條前内大臣

朝ほらけ霧のやまかけのみえすして鴈の羽かせにかへるらん

百首哥よみ侍りし時鴈

藤原雅經朝臣

いつくより秋のかよひちにかへる鴈を聞えぬ雲のかなたより

五十首哥たてまつりし時

僧正行意

水莖の思ひはかなき鴈の夜をかりの音すさむなかそら

題しらす

伏見院御製

鴈かねは雲ゐるそらに鳴くさえて霧の夜のさむきそら

相模

小夜をとも雲井になりて鴈金の空にきこゆる帰る宿

後京極攝政家哥合にたてまつりし時

寂蓮法師

鳴わたる雲井の鴈もさこそあらめ人をまつのは秋のゆふくれ

題しらす　紀友則

秋霧のはれゆくめる雲ゐより初雁かねてわたる空かな　新

坂上是則

いく千里雲ゐはるかに飛雁や秋をかさねて越路なるらん

平政村朝臣

浦風も涼しきほとにおとつれて秋をしらする雁の数

平義政

天河こゆる雁や七夕のおもひの中にかよふ玉つさ

入夜聞鴈といふ事をよみける　西行法師

かりかねは羽にかゝるをつきかねて雲ゐをわたる夜半の空

伏見院三十首歌に　従三位親子

秋風に初雁のそら霧なからほのかにきこゆる雁の声

百首歌あまたよませ給ひける時　御製

尾上にて夕日のこりて入日のうちに見ゆる雁の数

性助法親王家五十首歌に　後西園寺入道前太政大臣

夕されは雲にまかせて飛雁のゆくゑさためぬ秋風そ吹

題しらす　躬恒

秋風に山とひこえてくる雁の羽むけにきゆるみねの白雲

百首歌よみ侍りし時

前参議實名

さ山田のたえし稲葉にかりの庵あけても思ふ月そ残れる
秋田もるらん

従三位為信

庵ちかき秋の夜すからなかれ初霜のおくての稲葉露そふる

正和五年九月十三夜後醍醐院みこの宮と申し時
五首歌の中に月　前摂政家

中納言為藤

枕にも月の秋をよそにしてなれにし雲よりさえてみゆる月かな

権中納言具行

里人のきぬたのこゑもうちそへて月や秋の霜とみゆらん

元弘三年九月十三夜三首歌講せられし時
月を　後醍醐院御製

國のひかりの九月なかき夜の月を秋の宝と見る

貞和二年百首歌奉りける時

中園入道前太政大臣

なか月の月を夜すからそまちて松のこゑをもきくかな

元弘三年九月十三夜内裏三首歌に月
ときをまちて

前大納言為定

あくる年の九月の宵の月の秋をはなれぬ月かな

入道二品親王尊圓家五十首歌よ

従二位行忠

秋もすゝ枕のほかになくさめて月にはうれなりあさなさ衣
権中納言経賢
為家卿のさかゆきまてに里人の神の秋も志はりけり
寛元二年百首哥たてまつりける時関路秋といふ
事を
正三位経朝
たえまあはあきかせわたる関の神まつ秋のよはのはまゆふ
文保百首哥たてまつりける時
普光園院前関白内大臣
津国の芦屋の里に秋をきてもひとりさむけきさ夜の川風
貞和二年百首哥たてまつりけるに
後三條前内大臣

さ衣たか旅ねにもうちそへて千里の夜をもきぬたなるらん
花しく涙
前参議為秀
声ちかき月の鐘に夕月夜みかゝる露の下草
寛元百首哥たてまつりける時重陽宴を
前大納言為家
今日の九重に匂ふ菊はみなかゝる露のおもかけ
百首哥たてまつりける時菊を
関白前左大臣
九月の世のなかくさへてはや大むかしこきさかえはさかりま
黒戸のおまへの菊を御覧されけるを
堀河中宮

咲ぬれはよそにそかはれ菊の花あまつ雲井の星かとそみる

延喜十八年女宮の御屏風に

貫之

河霧の花とにほへる月よにはことにそ志ら菊

崇徳院御時菊遷多秋といふ事をつかうまつりける

大炊御門右大臣

いくかへり千とせの秋にあひぬらん色もかはらぬ志ら菊の花

入道二品親王性助家にて菊といふことをよみ侍りける

法眼行済

うつしうゑし千世まてにほへ菊の花君か志らかのかさしともなれ

長暦二年九月菊合に

土御門右大臣

白露のをきしかとのまかきにはうつろふ菊の色そ見えける

寛平御時菊合によめる菊をよみける

よみ人しらす

谷かはの天の河原の月影に菊のつゆをそはらひかねつる

紀友則

あき霧のたちにし日より菊の花うつろふ色のをしきにそ見る

人丸

ふる里の花のみしらぬ菊のはなこゝろをとめてをりてかさゝむ

よみ人しらす

時雨ふる時雨のあきの色そこゝろなきことのはなりけん

家百首歌に

洞院摂政左大臣

たつ時雨まことにかくて露の梅の八しほはなほそつきぬらん

嘉元百首哥奉りける時

従二位為子

秋山は志ぐれもなきを紅の下紅葉かはし露や深くそむらん

題しらず

大蔵卿長綱

しもふりし色や志ぐれに深からんとみれはてゝむなかき山

百首歌めしける時よませ給うける

崇徳院御製

入日さすとよはた雲にわけかねつたかまの山の峯の紅葉

弘安元年百首哥奉りける時

二品法親王覚助

夕日影さすやをちこち紅葉の色まさりてもみえわたるかな

百首歌奉りしとき紅葉

前関白左大臣 冬教

花の色はうつろふ山やまさるらん[illegible]秋の木の葉

亀山院十首哥に紅葉の心を

弾正尹邦省親王

山のはにちしほ深くも志ぐれとみ[illegible]紅葉

題しらず

前大納言為家

志ぐれまや嵐とともにわかれ[illegible]深き紅葉

権僧正果守

足引の山の紅葉やめくりてさきせる秋の錦なるらん

正三位成国

川のせにしたゝるおちの河浪くゝるみやまの錦なるらん

藤原清正

志くれせは色濃さまさりけり山の紅葉はわきもあらましせん

人丸

飛鳥川もみち葉なかるかつらきの山の木の葉は今そちるらし

清輔朝臣

たつた山本たちのみちの紅葉は色濃くなりにけり

康保三年大井河行幸の日よみ侍る

権大納言公實

水の綾とかつみる大井よりかけて小倉の紅葉ちりて葉

小一條院大井河にまかりける時紅葉浮水といふ事

を

大納言齊信

秋ふかくなりゆくまゝに大井河浪の花さへ紅葉しにけり

紅葉ちると

大中臣頼基朝臣

水の底にかけのみみゆる紅葉は色ふかくのこる浪やそむらん

秋三首中に

万秋門院

山姫の袖にあまたに縫ひかさぬ紅葉をそれとはらふなるらん

信生法師

たつた山紅葉吹きおろす山風やすゑは秋の河となるらん

今出河院近衛

かへしれに色もおちけり紅葉の林は水のすゑとも

僧正良瑜

手向つる秋の名をも惜しまれて宿さらに神なびの杜

紅葉送秋といふ事を

中納言定頼

残りける紅葉の色をみる時ぞ暮ゆく秋はなごり惜しまれける

秋の暮つかた白河にまかりて読侍りける

前大納言公任

数ならぬ我身にぞ知る山里の紅葉の色にかはる秋はて

陽成院御時哥合に

よみ人しらず

年ことにとまらぬ秋と知りなから惜しむ心のあらたまるらん

残秋の心を

刑部卿範兼

あすもなほ暮ゆく秋を惜しむらむかはらぬ空の色につけても

百首哥奉りし時九月盡

内大臣

暮て行く秋のなごりとおもふやらん袖にぞ露の置きまさりける

福原に侍りける頃長月のつごもり日暮ぬれば
て海邊九月盡の心をよみ侍りしに

平経正朝臣

入日さす浪のゆくゑをみて和田の原波路に秋の暮にけるかな

千五百番哥合に

大納言通具

よそにゆく山の端さへ秋暮て月を友なる山の夜嵐

いまたみこの宮と申ける時十首哥めされし次に暮
秋といふ事をよませ給うける

後醍醐院御製

ゆく秋の末野の草はうらかれて霜にのこれる有明の月

題しらす

従二位家隆

立田姫わかれかなしみ月も見をくらぬ宿にかへる秋かな

新拾遺和歌集巻第六

冬哥

弘安元年百首哥奉りける時

前大納言為世

露わけし野へのさゝはら風ふきて又霜にかはる冬はきにけり

嘉元百首哥に時雨

一条内大臣

しくれつる秋の名残の露をたにほさぬ袖にかゝる時雨か

百首哥めされし次に初冬を

御製

しくれつる秋のなこりの袖もけふ冬にかはれる時雨なりけり

落葉　　　　　　　　　　　　　　　　　　　法皇御製

吉木の庭に今一きおもとけりしを吉つ世撰くゆ時雨

大蔵卿有家

木葉ちるも山風のおとしける時雨ならぬあかつきの雲

百首歌よみてまつりし時時雨

前大納言為藤

さえわたる雲ゐのよその山風さ時雨流るる袖のしるらん

文保三年百首歌奉りけるに

六条内大臣

吹をくる峯の浮雲のかさなりて山の時雨ふりくらし

嘉元百首歌よみてまつりしに時雨

昭慶門院一条

きしくれ雲なきさこそ山おろしの風にまよへとゆく時雨かな

中納言為藤

吹よはる嵐の後のはれ間よりうき雲やまた嵐にさらぬ時雨ふる庭

元弘三年立后の御屏風に

正二位隆教

三輪山の時雨ふりにしかけ見えて河の杉むら雲のかかれる

前大納言為世家にて時雨をよめる

従三位為理

うき雲をとゞめもあへぬ山嵐のたえ間たえ間にふる時雨かな

近衛関白前左大臣

冬哥の中に

玉くしけみむろの山を越えぬとやわか宿よりもなく時鳥

文保百首歌奉りける時

三條入道前太政大臣

山風の吹にまかせてふきめくる木葉さへふる神な月かな

題しらす

権大納言為経

いくらふく風のさそひに枝をまつ庭のもみち葉

寶治二年百首歌奉りける時落葉

山階入道前左大臣

冬来ていさゆる嵐の山風につもる木葉のかくれぬ河

伏見院三十首歌の中に

永福門院

はらふとも冬やはなれぬ初時雨庭の木葉にふる音そきく

題しらす

前大納言良冬

吹まよふ嵐の空の浮雲に時雨をさそふ木葉かな

権大納言公明

むら時雨あまりのこりてさえゆくも木葉吹まく嵐のおとかな

伏見院御製

うきてゆくものかなたのむら時雨外山の空に朝晴けり

家の五十首歌よみ侍りけるに朝時雨

二品法親王覚助

木葉ちる外山の風やはらふらん時雨にたらぬ浮雲の空

題しらす

如願法師

ちる紅の山の紅葉ちりそてさひしきに錦はよそにふる時雨かな

弘安元年百首歌よみてたてまつりける時

権中納言公雄

ゆふ月の影やまたるゝ浮雲のあとなき空に時雨ふりつゝ

冬歌の中に

皇太后宮大夫俊成

うち時雨人の袖のみぬれまさるふるやはかなき秋をあらはさん

後徳大寺左大臣

きえ人の袖さへぬれぬ木葉ちるをとは時雨にまかへつれとも

赤染衛門

いとゝしく物おもふ秋のひとりねに袖にしくれのふりまさる哉

弘安八年八月十五夜三十首歌よみける時時雨を

前大納言為兼

落葉まて散てさひしき時雨には吹しくれける松の嵐か

後法性寺入道前関白家歌合に

落葉といふ事を

松か中の木葉の時雨のおとなりてあくる夜まての峯の嵐に

瓔子内親王家宰相

今まての木葉の跡を庭の松に紅葉と散織まし

三條右大臣家の屏風に

貫之

山たかみ梢をはらふなかれくる滝よりさきに散る紅葉哉

落葉を

殷富門院大輔

水上に風やふかし大井河あちなきもむすふ瀬のしからみの糸

嘉保三年大井河行幸の日よめる
中納言祐家
大井河ふるきの御幸に紅葉をなかれひさしき跡をみせける
寛治五年十月白河院大井河に御幸せさせ給ひて
落葉満水といふ事をよませ給ひけるにつかうまつれる
権中納言俊忠
大井河なかれもみちは紅葉葉のにしきとそみる
宇治にまゐりて侍りける時よめる
躬恒
河上の宇治の網代はなみ紅葉なかるる淀に落まさりける
貫之

松にこそ紅葉をみせし一とせの枝はのこれる松の
最勝四天王院の障子のうた
如寂法師
宇治山のおろしにおつる紅葉や網代によるる錦なるらん
祐子内親王宇治にまかれりけるに紅葉の
ちりて多くうつりけるを見て中納言うた
橘俊綱朝臣
神な月紅葉の山はさそはれていまや紅葉のわきまさるらん
祐子内親王家紀伊
あらし吹く紅葉の山のみな紅葉よるる錦ぞかはりたる
文保百首奉りけるに

前中納言雅孝

筆とりだに風のさはりて志もかれむなしき野辺の霜

延喜十年の菊合に

是則

菊の花冬の野風にちりもせでうつろふ色や霜おきぬらん

範恒

玉も花ちらぬもうきことゝいはでかれゆく草の霜の色かな

建保五年内裏歌合に冬山霜

信實朝臣

もみぢ葉も散りはてぬれば冬の日に見る霜のみぞ山のはの色

後宇多院に十首歌奉りける時冬草

前大納言實教

風さゆる浅茅が庭の夕日かげくるゝもやがてむすぶ霜かな

寒草帯霜といふ事を

西行法師

難波江の汀の葦に霜さえて浦風さむき朝ぼらけかな

百首歌奉りし時冬草

常磐井入道太政大臣

霜むすぶ籬の荻の枯葉にも猶きこゆるは風の音かな

御製

かぎりあれば枯ゆくかやの下葉までさやぐ嵐の霜の下荻

花しら露

土御門院御製

みわたせは末も露も秋くれて尾花にすくる風さへさむし

寛元百首歌に

従三位為子

冬きぬとおとにも枯ゆく山里の人めや草のゆかりなるらん

鷹狩をよめる

権大納言忠基

みかりせや今日はむかふの庭さへ松か枝を払ふ霰もかな

題しらす

前大納言為家

狩人のいる野の草の霰たにつもるや冬のたよりなるらん

前中納言雅孝

深山やあしの枯葉に風さえて霰の月に千鳥鳴なり

中納言家持

楸おふる河原千鳥なくなへに妹かりゆけは月わたるみゆ

寛元百首歌よみ侍りける時千鳥

今出河前右大臣

冬来れはさほの河風さゆる夜の深き月にや千鳥鳴なり

題不知

法皇御製

なるみかた汐干の千鳥明かたにこゑのみさは古郷そなる

暁千鳥と云ふ事をよませ給ひける

後二条院御製

浦遠く汐ひの潟のあと数さむし霜の白洲のあけかたの空

文保二年八月常盤井仙洞にて御会の時人々題をさくりて歌つかうまつりけるに千鳥

正三位隆教

我やとや浪たつらしなみなと(?)にたつくらそなき(?)
松のらむ(?)を　中務卿宗尊親王
夕日(?)の山おろしにて浦波のたちみちぬらし[illegible]
湖上水鳥を　中納言為藤
みなれさほ(?)さすや(?)ほのかに[illegible]のけにまかう(?)
鴨とりの(?)はらひもやらす[illegible]
源義高朝臣
慈快(?)法師
あし鴨のうき寝の浪にぬれて上毛も霜やおきてあかさん(?)
崇徳院御時五十首歌に
八條前太政大臣
寝ものすら鴨の上毛をおきかふる霜のをくかはわかみなりけり(?)
家に五十首歌よみ侍りしに池水鳥
すみなれて汝(?)か芦まをいつる鴨の[illegible]
入道二品親王道助
あらくれ(?)に霜のをきや[illegible]
法三位行能(?)
守覚法親王家五十首歌よみ侍し
前大納言隆房
寝ぬよさへはらふ上毛にさゆる夜の鴨の玉藻の床やなからん(?)
百首歌たてまつりし時冬月(?)
民部卿為明

さゆる夜のかくらの庭の霜神のみあかしに月そ照りける

松尾ゝを　信尊法師

内侍所の神のおもゝかゝてさえ霜夜の庭に月影そ冴ゆる

元弘三年立后屏風に五節をよませ給ける

後醍醐院御製

袖かへす天津をとめもおもひ出よ吉野の宮の昔かたりを

宝治二年百首歌たてまつりし時豊明節會

従二位行家

蓬莱山のしるしも積りけらしなあひのゝひ久しき光

冬歌の中に

前大納言為家

霜置の夜深き霜の上に月は何ゝる雪かゝ付ゝ

中納言為藤卿白河にて十首歌よみ侍りし時河上冬月

前大納言實教

大堰川瀬ゝに氷りもやとりて冬の嵐に河音たえて月や宿る

題しらす

遊義門院

をのつからこほりのひまをゆく月のかけさむけなる山川の水

従三位成光

音羽河浪の音はおさまりて嵐風にけふも浦まにこほる月影

前大僧正植守すゝめ侍りし日吉社三百首歌

冬月を

前大僧正實超

さよ千鳥入海さむき冬枯の松原の波にこほる月影

湖邊冬月といふ事をよみ侍りける
僧正慈鎮
にほの海やひらの山風さゆる夜の空よりこほるあまの月
百首哥たてまつりし時冬を
権中納言時光
さゆる夜の霜をかさねて袖の上に庭火たく月の影ぞさむけき
冬哥の中に
枯わたる草葉の露も白妙にやどるもさむき月の影かな
按察使公敏
千五百番歌合に
前大納言忠良
冬の夜は浅茅が原の霜の上に月影さえてかれし篠はら
永仁五年仙洞歌合に
昭慶門院一条
枯の色はなほさきたつる霜の上にのこれる月の影ぞさむけき
文保百首哥奉りける時
権中納言公雄
まれにのみ里はとほ河も山おろしにさえゆく冬の夜半の月
題しらず
左近中将善成
志賀の浦やさえゆく風にたちまよふ雲間に出る山の端の月
冬月をよめる
祝部成茂
枯わたる尾花が末にふく風のこほりてすめる山の端の月
左京大夫顕輔の家の歌合に
祝部成仲

名にしおふ宮さへこほる冬の夜の月のひかりを雪とこそみれ

二品法親王覚助家五十首歌に名所暁月

前大納言為世

さゆる夜の雪げは空のむら雲をはらひてつくる有明の月

中納言為藤家五首歌に河氷

頓阿法師

大井川瀬々の井てにはこほりてもなほ岩こゆる波の音かな

百首歌たてまつりし時

右兵衛督為遠

さゆる日はこほりのみかは吉野川岸の岩ねにかゝる白浪

文保百首歌たてまつりし時

前大納言為定

きえかへる冬の河原にこほりゐてなほ下むせぶ水の音かな

冬歌中に

隆教

谷川やむすぶ氷の下むせびたえだえなりし音も聞えず

権大納言宣明

音たてし嵐や松にさそふらん浪にゆられて志賀の浦風

文保百首歌奉りし時

従二位宣子

風さえてとけぬ氷の衣手にかへりてまさる夜半の霜かな

西行法師人々すゝめて百首歌よませ侍りけるに

前中納言定家

紅葉のをとは時雨のたえま(?)にも霰ふる也(?)なん

建保五年内裏歌合に冬野霰

参議雅経

うらの野や宿かり衣雅まけるさも(?)やふかき(?)あられふる也

千五百番歌合に

法眼源兼

玉藻かるいらこのあまのぬれ衣白妙にして霰ふる也

嘉元百首歌めされける時霰

後宇多院御製

風寒き空は雲けに数そひてかりしも庭にちる霰かな

文保百首歌たてまつりける時

前大納言為定

庭の面は枯てのこれる冬草もなをうづみても降る白雪

雪の歌とて読る

従二位為子

いつしかと雪には跡もなかりけり人めかれにし庭の冬草

百首歌たてまつりし時冬歌

前大僧正賢俊

流るとも行衛みえぬ池の水に消ては庭にしく雪

題しらず

法印長舜

[illegible]の雪足をとと絶えくにしられにこそ[illegible]のあとも消

伏見里雪といふ事を

後京極摂政太政大臣

里は[illegible]雪は[illegible]すゑや[illegible]

建保四年百首歌に

前大僧正慈鎮

ふる雪は[illegible]むすふ[illegible]

題しらす

中納言家持

初雪の庭にふりしき寒き夜を手枕まかす独りかも寝ん

好忠

都も[illegible]雪[illegible]深山の里

文保百首歌たてまつりし時

六条内大臣

[illegible]山里に夜半の雪[illegible]

題しらす

平親清女

枯わたる尾花か末の[illegible]白妙の[illegible]

文保百首歌たてまつりける時

後花山院内大臣

[illegible]白雪のつもりて降る冬木の末

寛元元年十首歌合に野外雪

後嵯峨院御製

いとゝ又かれゆく[illegible]むさし野やあさきる雪の[illegible]

松上雪を

後山本前左大臣

[illegible]世[illegible]雪[illegible]

源光行

きけは夜の枕のみゝにさそはれて霰ふるなり[illegible]

源頼貞

水鳥の鴨のはかひにたえて松の末葉も霜ぞかゝれる

嘉元百首哥の中に雪

後西園寺入道前太政大臣

月影も末の松山明かたのよひりこほれる峯の白雪

貞治百首哥読めしける次に冬月

後光厳院御製

白妙の光をそふる冬の夜の月のかつらに霜やおくらし

題しらず

後鳥羽院御製

かきくもり神やとまれる冬の日の三輪の檜原に雪の曙

百首哥めしける中に

二条院御製

冬の夜のさゆるにまさるみかきもりうつるあけ[illegible]

白河殿七百首哥に河冬雪

前大納言為氏

降つもる雪をかさねてみなせ川[illegible]

平兼盛大井河の家にて冬の夜待[illegible]

三条院女蔵人左近

大井河その夜山風の寒けさに岩うつ浪を雪と見つゝ

建保五年内裏哥合に冬海雪

[illegible]内侍

漕かへるたなゝしをふねあとたえて難波のあしの雪の下折

道助法親王家五十首歌に

正三位知家

わか宿はたかき風をもみしものをゆかしらせて名のみ冥かさなれる

文保百首歌たてまつりける時

津守国冬

箱根山雪つもりて年暮のかたみに春はわたるとはなし

寛治二年百首歌読侍ける歳暮

前大納言資季

いそくとてとしのはくものをいかに年のかたみにとそ思ひかねん

百首歌中に

花園院御製

ゆきそめしことしもとおしむにも恋とあすとしをわかて暮のわかれ

中納言にて殊に侍りける年光俊朝臣にすゝめ侍りし春日社の五首歌合に

前中納言高定

暮ぬれはいそくとも我身はうきとしのくれにこそあれ

歳暮はとかくとしを行く年の行ける

御製

いそきにも君か暮ともしらす花は行としのあきまつりこと

新拾遺和謌集巻第七

賀哥

左大臣の佐保乃家に御幸せさせ給ける時

元正天皇御製

たますたれ花さくやとの松をそ流ける宿は万代をへよ

長元四年九月上東門院住吉詣侍りける時人々哥よみ侍りけるに

法成寺入道前摂政太政大臣

君か代はなかゝる橋のためしにも神さひにける住吉の松

建久二年八十嶋のまつりに住吉の浜にてよみ侍ける

西園寺入道前太政大臣

君か代は八十嶋かくる浦浪の音にも風しつかなる住よしの雲

弘安八年住吉に御幸ありて社頭述懐と云事をよませられけるにつかうまつりける

津守国助

神代より住よしの松そふりにけるそれありて千世を君かさかへむ

松延齢友と云事をよませ給ける

権大納言公明

こゝろみの玉松かえやいく千世を君にひかれてかけんちとせん

暦應二年六月仙洞にて松影映池と云事を

等持院贈左大臣

風かよふ松をうつして池水の浪をも千世の數にかそへん

弘安八年三月従一位貞子に九十賀給はせける時に見
侍ける
為道朝臣
かそへしる齢を君かためしにて千世のためしに春はまちけれ
亀山院内府亀山殿に行幸ありて花契遐年といふ
事をよませられ侍しに
後深草院大納言典侍
さく花をけふの御幸にためしめてかはらぬ末とをき千世
中院前内大臣
万代の春にかはらぬ折をえてひかりそへける山さくら花
二品覚性法親王に八重桜をそへて遣し侍る
法橋顕昭
君かへん千とせの春をかさぬへきためしにみゆる八重桜かな
返し
二品法親王覚性
千世ふへきためしとさけは八重桜かさねてくもゐともあふくなるかな
元久三年正月高陽院殿にて庭花春久といふ事を
前中納言定家
あまてらすひかりしちとせの春の色をちよとみきりの花そかれ
元徳二年中殿にて花契万春といふ事を講せられし
時
今出川入道前右大臣
君かため久しかるへき春にあひてそ花もかさねて万代をへん
文和五年二月松有佳色といふ事をつかうまつりける
前大納言為秀

君のみや千世ふる松の花なれは今十かへりまてとちきるらん

康永三年閏二月仙洞にて松延年友といふ事を講せられけるに

照光院前関白右大臣

千世とともかきらぬ君か友なれは松も花さく春やかさねん

前大納言經顕

冬ならぬ友とや君かちきるらん十かへり松の花咲まて

入道前内大臣

冬ならぬちきりや人の山風の松の花をそ千世の友とみるらん

前大納言公蔭

松枝も今百歳の冬をへて千世ともあふかん君か八百

前大納言忠季

ゆく末も松にちきらんひめこ松けさより君か千代をちきりて

貞治二年二月春松緑といふ事を講せられけるに

前参議實名

君か代の千世ふる春のゆく末を松のみとりの色にまかせし

藤原雅家朝臣

いく千世をみとりをそへて相生の松と君とのゆくすゑの春

三十首歌めされける次に

花園院御製

冬ならぬ松の嵐の吹風は萬代ふる聲そきこゆる

題しらす

左兵衛督基氏

鶴の思ふ木にも松の吹風の音そ聞ゆる萬代の声

文保百首歌たてまつりける時

前大納言俊光

君かすむこやの山の玉椿いく代さかへん末そひさしき

百首歌めされける時祝言

御製

代々をへて民をあはれむ誠あらはまたいくちよの末もかはらし

等持院贈左大臣

四方の海七のみちまて君の代にをさまりけるもめてたかりけり

正中百首歌めされける次に

後醍醐院御製

よもの海をさまりぬらし四方の国のやすきを見れは浪も静けき

建仁三年十一月和歌所にて九十賀給はりける時つかうまつる

皇太后宮大夫俊成

百とせにちかくなりぬる君か代のつきせぬ末をいはふ嬉しさ

正三位知家

和歌所の御会に年浪かさなりて御前にて人々歌つかうまつりけるに

松の時竹をまつ清勝の御製九十賀の給ふ

あまてらす神やうけけむ君か代はいく千世経ても久しかるへし

こたへ給ひけれはかへし

むかしより今のときまてつかへきて

君にまつの嶺の年を重ねつゝ

見ゆらん御代を重ねて祝ふ

万よつとめてつかうまつる

建礼門院右京大夫

君かためふりにし松の九重の十のゆきをも待なし

皇太后宮大夫俊成

亀山の九かへりの千とせをも君か代にそへゆつるへき

建保三年○大井河行幸の日よめる

式部卿敦賢親王

大井河水やきよきにかめ山の世々のけしきみゆる幸とおもふ

建保六年中殿にて池月久明といふ事をよませ給ひし

前内大臣

君か代のためしにすめる池水よ千とせをちきる秋の月

従三位行能

影きよき池の鏡にてらす月を幾千代秋や君のみん

信実朝臣

あきらけき君か代にすめる池水の月やちとせのかけの秋

建保二年九月月契千秋といふ事を

前中納言定家

君か代の月と秋とのかきりなきちきりや萬代のためしなるらん

東三條院石山にまうてゝ侍りけるに

ちとせへて月もかはらぬ石山のかけ

きさきの宮の御覧かくて侍りける

権大納言行成

君か代はちとせの秋をかさねつゝ長月の菊を今日待そ

後堀河院御時北白河院に御幸ありて

松は千代をへぬへきさらし松陰せられくらふよろめり

前大納言實教

雨露のめくみにそむる緑葉の千かへを重ぬ千世の松

元禄二年立后屏風に

後宇多院宰相典侍

限なきむかし千年の翠はに露も千世をかさねて松のすゑしき

崇徳院位におはしましける時法金剛院に行幸

侍く萬歳契千秋といふ事をよませ給ひけるに

三條内大臣

萬代の秋にかさねむ松か枝は萬世ふへきいろやかはらし

百首歌よませ給ひける時庭竹

前関白左大臣

雲の庭にみとりの色そへてゆく末とほき千世の呉竹

正和五年内裏歌合の時竹臺呉竹をよみ侍る

けるを奉るとてむすひつけ侍る

後照念院関白前太政大臣

世々をへてみかきの竹の操なれやすくも千世をまもるかしこき

延文四年庭上鶴といふ事をよませ給ひけるに

内大臣

松さむき雲井の庭に聞ゆなりあかね千年の鶴の聲

人の子にまゐらせて侍りけるにかきつけてつかはしける

弁乳母

鶴の子の千代をかさねてむつ毛衣いく世もちよの数にかさねん

祝の心を　　源師光

むしろ田に千とせをへてすむ鶴も君か齢をそらにしるらん

十二月晦日に藤原基俊の子法師となるといふをきゝて

ちかへつゝ涙とそてにひとつつらまし

権僧正永縁

千とせへてつきせぬ法の鏡にも千世の影見え君かみかゝき

延て　　基俊

万代はうち世をへてくもらぬ鏡君かみかけはあまてらさん

百首歌たてまつりし時祝歌

権大納言義詮

わか君は人をかゝみとみるもあふくへくもて千代をつらねん

祝を　　法印定為

和歌の浦に二たひ玉をみかきてそあふへき世のためしなりける

貞和百首歌奉りし時

入道二品親王法守

天地とともにひさしき敷島の道の末ある御代にあふかな

嘉元百首歌たてまつりし時

津守国冬

わか君は世をしろしめせ千とせまて民の世の末もあまねく

洞院摂政家百首歌に祝

源有長朝臣

君か代はつきせぬ長柄の結津洲にみちひる塩のはてしなきかな

後三条院御時大嘗会備中国哥

藤原経衡

たのもしそいてゆく末を松のはへさきの村のなかき絶えせし

堀河院御時大嘗会近江国哥

前中納言匡房

三津山いなほの生ふる瑞穂の千代のかすを世に見えてもこそ見る河瀬かな

高倉院御時大嘗会備中国哥

清輔朝臣

かねてよりきく玉田の露の玉ひろひかさねや君か千代のかすへん

松かけにさく御屏風のうた

たゝしとそ君か世にてらす月出る海のあさみ鶴かな

今上御時大嘗会御屏風に

権中納言時光

時をえてちとせのむしろにつくりてもかひある君か萬代なるらん

文保百首哥奉りける時

前大納言為定

家の道の跡をたとりて今さらにみちしるへとや君かめくみに

新拾遺和歌集巻第八

離別哥

きささらひよ枕のひきこまろ今は
衣笠前内大臣
まれなりしなかとおもひもわかれむる人にはいまやいつる

藤原光俊朝臣あつまへまかりける時
中務卿宗尊親王
みやこまてわかれさへ今そ出るせめてわか枕にはるかなる
あつまへゆくへはつつはまる

藤原隆信朝臣
東路の野原篠原ゆきてみむ涙は枕のひまもなし

堀河院御時百首哥に別を
藤原仲実朝臣
こまろ今に花をみやこにいたらはるかに雨とたえ

京極前関白太政大臣家哥合
別れにはまよひとゝめの涙からかをとれぬなれとなかめ

題しらす
大納言成通
人知れすとはにめくりし世と契りしかひなき身をなれ

大宰権帥経信卿遠任をあつまの国のわかれの供にと
参りけるにはへて
聖武天皇御製
我の浦にかるなる人もしらねはゆくすゑまても枕にこそ

越中守にて侍ける時少納言になりてのほり侍ける
時國のつき鏡を侍るとてつかはしける
中納言家持
いませ(?)なれあふさかの関路ふみそめて小夜鳥鳴をきかせてやはまん
藤原治方遠江に成て下侍けるに鏡給んとて給侍り
言はれとまちてここまて見れは遠く(?)てつくしまさる
権中納言兼輔
あふ人をまつ秋風の夕暮は我さへ旅やおもはれすらん
成為清卿筑紫にくたりける時見送り侍る
成為清卿母
こゝろあまた世の中(?)へりさへてまちてかはらぬ人の我(?)をまちはて(?)
遠き国へまかりける人に杖なと給はせ侍るとてまき丸大
権僧正道我
限ある命の世にはめくりあはむ杖もせあへくちはてぬとも
人々さそひて難波の月見にまかりて暁のかへるさによ
前中納言実任すみ侍るころあさみにゆきけるに
名残をしひぬる時鳥浪の上の月を名残にて難波江
の芦のうき舟潮やまたはれんとすらむ
前大納言為世
あはれまたあふを命と出立ちてまた名残をもこゝろありけ(?)
前大納言實教
浪のうへの月影たえぬ難波江のあけはの小舟やさえたらん

大峯のかさありといふ所にてよみ侍る
さ浅たちてきりまれは　大僧正行尊
又いつとあひみん事もさためなきわかれをしむ心を
与君後會知何日といふ事を
土御門院御製
きのふけふあすとも知らぬ命をもたのめてまてる人こそありけれ
別れなん心を
前大僧正慈鎮
多くまちたるをかるあまの世のならひ又あひみるもの事しらねは
前大納言為家
あふみちのなかきうき世をしのひつゝはるかに見ゆるあはれ人
道因法師みちのくにへまかりける時遣はしける
人に遣し侍りける　俊恵法師
これをみてなほいとゞしくおもふかな
都にありし時後徳大寺左大臣太皇太后宮大夫にて侍りける時女房の中にて夜すがら月をみて物語し侍りて
曉かへりける時小侍従をとゞめて出て待けるをとりけり
ありてやりける
藤原経尹
物かはと君がいひけん鳥の音のけさしもなどかかなしかるらん
参議為忠美濃国より都にのほり侍りける時
源頼康
かへるにもきけは涙もゆく人のあとよりさきに不破の関守
題しらず
藤原基世

あつまへおもむき侍けるに相模国[illegible]
藤原景綱あつまに下りて侍けるに後の宿へつかはし侍ける
前大納言為世
おとの露[illegible]なけくとはみちの後山こえて[illegible]
かけ[illegible]

新拾遺和歌集巻第九

羇旅哥

題しらず　よみ人しらず

あかすて家を立わかれ白雲のたなひく山をこえてきにけり

人麿

玉藻かるみぬめをすきて夏草の野しまか崎に舟ちかつきぬ

真子[illegible]

貞数親王

[illegible]浪の玉[illegible]

題しらず　よみ人しらず

逢坂をけさこえてみれは近江[illegible]

千五百番哥合に　大納言通具

とまりする小嶋の磯の浪枕さこそはゆめもさえぬ浦風

旅泊　中納言為藤

音ふかき浪の枕にゆめさめて山のはちかく月をみるらん

羇旅の心を　如願法師

和田の原千鳥なけて志ら浪のよせたるかたにからふ奥の船

皇太后宮大夫俊成

すみなれし松の下庵あくかれてなくさめかねつ秋のあはれを

百首哥詠ませ給ひし次に羇旅　御製

かきりなくさはなれゆく川ちにも猶古郷のなこりをそ思ふ

羇中暮といふ事を　前大納言忠良

草むすふかりねの床の枕にも露やかさねん夕くれの空

旅の心を　今出河院近衛

ひなまてをひかへの秋の露そてに志らぬ旅人の袖ものこらす

永仁元年八月十五夜内裏十首哥に

小秋旅といふ事を　前大納言為兼

ゆく里もしらせぬ人とそらにいつか見ん旅の空なる秋の夕暮

為道朝臣

秋の野をあまた旅ねの草枕露にかりねもとひそへて

百首哥よませ侍りける時羇旅

権大納言義詮

杉原見えし山もゆく末も極たへて野の露わけ行吉野まてかな

羈中旅といふ事をよませ給ける

伏見院御製

露ふかき野への小篠を手枕にかりねの数の夢をむすはん

題しらす

前参議為秀

明まつも草の枕の末の露をなほとはれてはならぬよと出ぬ

藤原宗秀

東路の露分衣ひきかへてや草の枕にむすほほれん

元亨三年亀山殿にて七百首歌よませられて奉りける

旅小様行

前中納言有忠

都をは霞ふく出て逢坂の関よりまたも思ふかな

題しらす

按察使資明

関の戸を今や明ぬる月影にねられぬ鳥のこゑに出る旅人

中園入道前太政大臣家にて羈旅といふことを

頓阿法師

あふ坂の名にのみききて旅ゆけは朝霧ふかき関の杉むら

野旅

旅人の露けき野への仮寝にはむすふ枕の草の枕か

権中納言宗経

五十首歌の中に羈中夜といふ事をよませ給ける

後嵯峨院御製

今宵もや草の枕にあまた夜の夢路をたとる野路の旅かな

守覚法親王家五十首哥に旅　　大蔵卿有家

桜色にすりそめし旅衣けふ宮木野の萩か花すり

旅哥に　　藤原行春

分いる花の千草はそれとしも枯ゆくすゑのむさし野の原

東の方へ修行し侍りける時白河の関にて月あかゝりけれは関屋の柱に書付侍る　　西行法師

白河の関屋を月のもる影は人の心をとむるなりけり

元亨元年八月十五夜内裏哥合に　　丹波忠守朝臣

いく秋か月にたちぬる旅衣のそてにのこして白川の関

羇旅　　後九條前内大臣

嶺風にはなれて須磨の関越て松ふく音を聞佐夜の中山

あつまへくたりける時よめる　　祝部成茂

足柄の山わけ月に数そへてあまたは袖をかりそめのこゑ

夕旅　　善了法師

ゆく末は月やさそはん旅衣日も夕くれのさやの中山

兼好法師

旅の空いく夜をかさね出ぬらん山のはかけて月をみるらん

荒しの原　　前中納言為相

まとひ入たまる出風の雲の戸に月をさそひて嵐ふくなり

後光明峯寺前摂政左大臣

霧こめてやかての槙の戸にてあり明の月に物おもふらん

荒木田氏忠

わか槙て経はおもく人すまぬ山里は槙の月もさしけり

中納言家持

槙の戸のとさかりしかたの山越て月の光をわか待らん

槙の戸は出るす中に

後鳥羽院御製

さゝれた都にさす木のまもる月の袖にみゆらん

伏見院御製

槙の戸の嵐の枕更て寝覚の山は月そかゝる

元久元年七月宇治御幸の時五十首歌に

六条入道前太政大臣

いほりさす山の宇治風の嵐吹槙のかつさえて出る月影

和歌所六首歌合に槙月 関東

宜秋門院丹後

槙の戸の庭の葉もりて木のまの月を袖にみるかな

題しらす

源頼貞

朝嵐て朝風さむき夜な我秋の妹や衣うつらん

嘉元百首歌に

正三位知家

ちりひさやきのちへの枕風にさこそ葉かるき独ねの袖

題しらす

法印長舜

旅枕夢の衣をかへさすは霞のもとに花をなりけし
源業氏
草深み露ちりぬれはちこに涙のこる夢の枕
羈中夢　　前大僧正實超
わか里にかよふゆめちやたちかへる枕の夢も夏草
旅の心を　　左京大夫顕輔
草枕袖のうへにもおもひてもまつ人ことそ梅さき
あつまにはそてのまつ村屋とおり家の男たちて
世をすてりおもひくひもはつ待けり
源仲正
露さゆる枕のあさの床はしさひしさ残はひとつとさすかたふ

題し　　よみ人しらす
枕かる秋を衣をかへてさへも恋しやまきこも佐つまさき
白河院七百首歌に旅宿時雨
前大納言為家
手つ衣また旅ねのも袖ぬれてさやかにしくらん
羈旅秋を　　前大納言為氏
里遠き山の露はしくれて夕日に旅寝の枕
冬旅　　卜部兼直
こえ行く雲のかけはしに枕の雪におちむ足柄の関
雪の中　　二品法親王尊覚
座ち枕ぬれつらん月の雲を手やかへす冬を

寂真法師
甲斐かねははや雪しろし神無月しくれてこゆるさやの中山
大蔵卿隆博
様歳暮を
かそふれは年の暮のみ東路やかきみくしすくす河の瀬
題しらす
前大納言為家
様ころも見えて渡しつる橋のむかしの跡なり袖にはうつる
道助法親王家五十首哥中に様春雨
源家長朝臣
宿もなれさらめにさえさやなきさてふけゆく春雨哉
題しらす
よみ人しらす
春あさき宿なけれは様成宮の影をさかえ
源季資
ひ葉のかはらの一軒の宿ともへ難波の芦のみそなかやおきん
前大納言為世
もろ世の春日社三十首哥中に
法印云順
いにしへは飛火の野守かすめるやなかの庵の白雲
百首歌よみ侍りける時羈旅
右大臣
旅せん袖にかかりて様ある色かさねつゝ山の八重の白雲
道助法親王家五十首哥中に山様
参議雅経
春ちかくなりにしやまの雲にさきをめる宮方の風

様かはるもみちといふことを　花園院御製
深山木のそのさかへなく宿りし色にそめし秋の錦か
入道二品親王尊円
散りかゝる山路の紅葉をたゝへなきにしきひかり
あさからの色のきまりみちもなく
法印定円
露しもきえぬ紅葉はうちこえて思ふまゝに紅葉の岩
さ秋の中山をなほ行かひに錦きて行かせは
平[illegible]時
明日のその紅葉ちる里は染かさなりて霧のたえまの中山
錦しら波
性厳法師

浅からぬ宿をかけし紅葉かさなれる山は日ことにまさりけり
洞院摂政家百首歌に
従二位家隆
龍田山みねふきおろす大伴のみつのとまりに舟やとむらん
様の名を
紅葉ちるなみにそふ和田の原かさなる雲の末のしら波
祝部行親
貞和二年百首歌奉りし時
後岡屋前関白左大臣
ちる紅葉のうらにもなかれ涙とも紅葉や泊なるらん
元亨三年七月後宇多院にて十首歌講せられしに海邊
様といふ事を
前大納言為定

和田の原沖つ舟の…にも…重やと遥
嘉元百首歌めされける次に海路を
後宇多院御製
いかにして人もかよはん和田の原舟と風とのたよりならでは
保延元年内裏歌合に海上遠望
大炊御門右大臣
みなと出る舟人とものこゑすなり浪分けて酒…ぬる舟出すなる
檝の…を
二品法親王守覚
…海風わたる…浪もとゝろ(?)
洞院摂政家百首歌に
前中納言定家

秋…浜松が枝の音すなり袖に…浦なかつ人
百首歌奉りける千鳥
前内大臣
おもひ…いそ…友千鳥おほ…かたにさわぐらん
入道二品親王覚誉家五十首歌に
権僧正果守
…芦の葉そよぎ浦風さえて吹く浪の…
嘉元百首歌たてまつりける時
贈従三位為子
…むらさめの雲吹きまきて…松の梢…風
二品法親王覚助家五十首歌に 旅泊

藤原基任

梶まくらいくよみなとにかさねきて旅ねもいまはなれぬらんやは

道助法親王家五十首歌に海路

法印覚寛

衣手を志かの浦のうき枕涙もかゝる袖そぬれける

題しらす

平行氏

うき枕むすひもはてぬ夢路よりやかてうらみにかはる涙か

権大納言忠基

思ひやれたれかよるへの神ならて涙のうきね幾夜なるらん

従三位成清

向ひてもひく松浦にかゝる雲を雨となるらむみなと川舟人

法印源意

夜もすからねられぬ神の浦風にさむくなりゆく波の枕か

二品法親王覚助家五十首歌に旅宿

大江茂重

友ちとりこゑのみなれていまもこの浦の旅ねを思ひいつらん

題しらす

大江貞重

うきよりはあはれとおもへ旅のそらさすらひゆく身をはなれしもなし

太神宮へ奉りける歌合に羇中月

源兼氏朝臣

すみなれて月をも見つるふるさとのかけをわするゝ旅の袖哉

法眼源兼

伊勢島や月に打しく浜荻のかりねさむけき秋の塩風

羇旅を　　従二位家隆

松かねにひとしそなけき真野浦風夕汐浦の
あきこたへし荻

新拾遺和歌集巻第十

哀傷歌

題しらす　　人麿

草乃葉にをきゐる露のきえてぬきにし玉とみゆるあと悲き

日並皇子かくれ給ひける時よみ侍りける

久方のあめみることくあふきみしみこのみかとのあれまく惜も

天智天皇かくれさせ給ひける時よめる

額田王

かゝらむとおもひしをしらはみ舟のはてし泊にしめゆはましを

題しらす　　貫之

藤衣をりけるいとは水なれやぬれまさるともかはかさりける

子におくれて侍りける比輔親のもとへ申つかはしける

重之

恋しさは露(?)よりもけにおもふ事なきもの(?)の袖(?)の露(?)

祭主輔親

かりそめのなかはたれ(?)ねは悲しさのたえすそ(?)ゝく露のこほるゝ

三條院かくれさせ給ひて五十日の明方に

道命法師

ありし世の山路を尋ぬる事もなくて独(?)やまよふ関のこなたに

題しらす

赤染衛門

いとゞしくおもひのほかの夕(?)くれに人をうらみて歎きつるかな

思ふ事はるゝまもなき時雨かなこゝろのうちの涙(?)なるらむ

俊頼朝臣のもとにまかりて車をとゝめさせて

めて屋(?)ともひ(?)し時(?)よめる

新少将

たつねてもあはさりけるを悲しさのたえまもなくて袖をぬらせし

待賢門院かくれさせ給ひての御忌に三条の家にて百日

やまつりける

権宗(?)従三位通

世の中はあまの苅藻とおもへともくれゆくほとのかなしさそなき

堀河

かきりあれはかの名残をおもへとも袖をかはくの露のまもなし

題しらす

前中納言定家

見しはみなむかしの人の物がたり涙に袖のしぐるゝ時

鳥羽院かくれさせ給ひて御葬送の夜高野より出
たまさかにまいりあひてよみ侍ける

西行法師

こよひこそ思ひしらるれ浅からぬ君にちきりのある身なりけり

八條院かくれさせ給ひてほとなく春花門院失
させ給ひけるを鳥羽へとて車にてまかりける

信實朝臣

かさねける別をしりて上陽のこゝろをしるはなみたなりけり

母のみまかりける比よみ侍ける

藤原秀茂

[illegible]とてみ侍のはふかきをそふ袖と成りけるかな

なけく事侍ける比清[illegible]侍けるに

近衛関白前太政大臣

明暮はなとかたふむる面影のありてうきよをたのみける哉

浄土寺入道前太政大臣かくれ侍りけるのちのことゝも

前大僧正公豪

時のまも忘れはなくさまぬ物をおもふ身はいつまて袖のぬるらん

信實朝臣別をしたひて身まかりけるを

ゆかりて侍ける比よみ侍りける

如円法師

おもひいてゝみしよをしのふ袖のうへにいつまて露のかゝるなるらん

昭慶門院かくれさせ給ひける時人のもとへ申つかはしける

永福門院右京大夫

なき人の名をたつるにつけてもその心をよみける時よみ侍る
六條内大臣かくれ侍て後年の事いとなみ侍る時よみ侍る
　　　　　　　　　前権僧正円伴
おもかけもたちそひたるになみたのみかきくらしつゝ
　　　　　　　　　前中納言有忠
ことわりの秋にはあへぬ涙かなこれそまことの哀なりける
題しらす　　　　　源頼時女
志けてこそ世のならひとおもへとも猶わかれ路はかなしかりけり
　　寄哀傷といふ事を
　　　　　　　　　達智門院兵衛督
世のうさをいかはかりかはなけくへきうきにつけてもおもひしられて
無常の哥とて　　　前大僧正慈鎮
世中のはれゆく空にふる霜のうき身はかりそおき所なき
捨中言ふ母いさめ侍りて後よみ侍りける
母の身まかりて後母のもとへ申つかはしける
　　　　　　　　　隆信朝臣
忘れしとありていとへる後の世をかへすかへすもおもふはかなき
かくやつれてもありけれは人のかたみに侍る
時ならぬなかにもなほかなしきは
はかなき夢をみてそおもひしらるゝ
　　　　　　　　　　ものおもふころ
人しれぬ心の中をなけきてそうきよのなかをおもひしるらむ

これまてと世のなかちりしさくら宮ゐ
松ひかりなそらそいとおもせてさらに梅にさく神なかのこゝろ
伏見院御忌の比花園院にまいり侍るに
御製につけて奉りそ侍る
後伏見院御製
かきつらぬ神の御代によろつ代をまもるさくらのたのもしき哉
内侍て
花園院御製
冬の神の御代よりつたへきて八千代をかねし北野哉
陽禄門院かくれさせ給ひて後人のもとへつかはし侍る
也なり
梅窓使實継
松にて梅の花ちりなむのちのなかそかけるかたみなる
秋の月の光は清しやみても母のなきかけやおもひいつる
名所を読侍る　安嘉門院大貳
たのもしな心をこめて千方深き光をかけてき北野の月
後一条入道前関白かくれ侍りける又の年の正月
法をきゝ侍る　前大納言雅言
春とはに北野の露とおもひしにまた人の跡はかなくも
哉　源朝長朝臣
かきりなき御影をたのみし北野にて
入道二品親王性助かくれて後の月の又の日思ひとて
侍る法眼行済に遣はし侍る
法眼源兼

宮こにも秋かきくもれてふる雨の涙の袖をほしそわつらふ
やし　　法眼行済

思ひやる心をひとつにかきくれて雨の涙も袖にあまれる

中園入道前太政大臣かくれ侍りて二七日の法事の日よみ侍ける中に雑と云ことを

思ひくらぬ　　慶空上人

権大納言殿かくれ侍て雑とのみに侍りて後おもひつゝけ侍ける

法印定為身まかりて後

前権僧正玄円

時しもあれ思ふこゝろのうき秋にあはれもよほす野分吹ころ

さきたちし別の袖やいかならんかへらぬ旅の涙かきりなく

僧正隆経

母身まかりて後よみ侍ける

法印経深　添一

なき人のあとをもみてそ袖ぬらすけふやかたみの

行雅法印身まかりて服ぬきける時よめる

藤原行春

二月はかりおもひやたえんなき人の大納言も母の墨染の袖

民部卿為信の母すまかりて後服ぬき侍るとて

権大納言長家

きゝしまにめくりそ出にしくもゐ深夜の月とそ見る

父康成なく成て後よりよめる

大江廣房

なかりし跡の露とそかはらしかなさそ杉の萩か

猿さら見ゆる中に

鴨長明

なかめ侘ぬ十五夜をつくし秋の夜は一夜のかたみなるらん

前唐を入れぬ世の中の光もまさりぬる

壽成門院

露消し草葉にやとる月かけはむかしの秋の夜の枕なる

まつ人の音信侍らぬ

藤原俊顕朝臣

松の葉にうつる夜半のかけ涼しく吹秋風の月かな

月あかき夜二條殿にて後二条院の御筆なる

いて

西花門院

雲かゝる月の影さへ成ぬるともなほこの月の影

九月十三夜よそにてもよめる時よりかき侍る

承宗法師

あかすまに清き月は浪そえてむかしの空の月

源高秀

此夜をも神のかけの世の中のあはれ乃雲

世の中のあはれをしらせて人の秋をもよめる

枕に書つけ侍ける

式部卿久明親王

しはし世を遁とはなしにたゝ世にはきこえし枕みゝをそ出てき
母乃為ひとつ侍ける法花経の題の中に法花経の
心を

後宇多院宰相典侍

あはれなる松のうき世のゆめよりもさとれは神のちかひをそきく
むかしの成運法印か三十三年の佛事によみ侍
ける

法印栄運

かきくらす三十あまりの三とせまてしのふむかしもよそにやはある
枇杷皇太后宮かくれさせ給て後帳のうちを
なにとなくちりいませ侍けれは志て給ひてまかりけるや

めし筆も給らせかんくらる覧

江侍従

玉ぬきしあやめの筆はかはらねとそのかみ人の袖やぬれけん
等持院贈左大臣にて侍ける五月五日よみ侍ける

権大納言義詮

あやめ草ひきそかけたる神かきもいかにかとなりて袖の露
文乃年の三月晦日乃日常在光院にてよみ侍ける

性威法師

又もこむ春とたのまぬ身にしあれは年そわかれのかなしかりける
大納言經信職に侍ける又乃年の中にかくれける

出羽辨

あひ見むとたのめし人の霧さへのかへりましかはとそ思ひける

返し　　大納言経信

別れにし年をへたてゝ霧の間に神の御舟はけふこそあれ

後朱雀院かくれさせ給ての又の年白河にかよひ侍りせ給くる日よりさかりになりにけるに宮のうちに七月七日人の申侍けるをきゝてよませ給ける

上東門院

今はとていふ言の葉もあはて世をそむくなる七夕のこと

清慎公かくれて後はかなくなりて又の年の給けるに

さる事え侍りける　　廬義云

はかなき世のためしと聞し人の松も煙と成てかなしさ

子におくれて歎き侍りけるをとふらひける人のもとに

うしろめたくおもひしものを中空にのこりしかなきこゝろをやせん

祝部成仲

返し　　女

君をあいとゝ歎のもとにきゝしかなかなかめしさうなるとも

久安百首歌に　　前参議教長

水の面にうつれる玉ものゆらゆらとちりてや花のもとを

御涙にて給まへりけるたひこと物ことに思ふこゝろは

つかへまつる

二品法親王慈道

ちる我まてなにとなりにけりやつれにしきのもとに

歎き侍りけるをとひくる人のまへの松をよみける

法印實性
日数ふるはれまは法のみかさの神乃源を
苔して寸
已心院前摂政左大臣
露乃身をもろき物ともひとしらてあやなくそむかる春
雨中苔意
従二位家隆
すゑの露浅茅かもとをおく霜のひとりの秋の松風も
苔して源
権少僧都源信
鶴かおのあはれふかき旅をはつゝみのまきすてかへる之
賤従三位為子此後御たち(?)鶴の名をのこせる
権乃葉につけて前大納言為定の家にかよひ
頼阿法師

宇治の世はたえぬさかりはまつあさなき朝の花
色
前大納言為定
川津の名もなかりきかはらにはりをかさてゆふき権乃露
たれかあらぬ文の道あつまりかさねてかはるをしる
紙に書侍り
前中納言惟継
跡ならひみえかきとゝにかはらぬ水茎の跡
色
中納言為藤
かきなれしことの葉くさのあとたえぬかせにむすふ跡
正三位成国すゝめ侍りける百首歌に
祝部成光
ふるきかりの世はたゆまぬ心にまかせ其のあとつきさらん

従一位倫子みまかりける比

中務卿宗尊親王

ちる花のこゝろをかなしとおもひてみしにこそ我は迷はめ

後鳥羽院かくれさせ給ひける比の御かたみを

ならむとて

順徳院御製

春をゝしむこゝろもありけるをやとりのかたみに

にしき山の紅葉の月をみてうしとのみ

おほ世のはてはおもひしらるゝ

土御門院かくれさせ給ひける比の葬送の夜

津とふのあはれ御舟に帰る身のかなしさは

浪のそこにおもひいれて

朝夕はなみだのみなるゝ我が袂に

隆信朝臣

うき世なりけり